

平成30年度

文部科学省委託事業

# 高等学校における次世代の学習ニーズを 踏まえた指導の充実事業

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、  
個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立

～社会でより良く生きていく力をつけるために～

〈 1 年 次 〉

報 告 書

平成31年3月

京都市立西京高等学校 定時制

## はじめに

近年の定時制高校は、全国的に従来の「勤労青少年に後期中等教育を保障する」という役割から、不登校経験のある生徒や様々な「困り」から個別の支援を要する生徒など多様な学習ニーズに応えていく役割へと変わってきています。そのような状況のもと、本校では平成28年度から、「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の一環として、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、個々の生徒のニーズに応じた支援を可能にする校内体制作りという研究の中で、様々な「困り」を抱えた生徒に対する支援方法の確立および校内体制の構築に取り組んでまいりました。その取組を通して、「困り」を抱えた生徒への支援に対する教職員の意識は深まり、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーとの協働や、効果的な外部機関との連携もスムーズになってきました。

今年度からは「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」として、個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立はもとより、より具体的なテーマを設定して研究を進めてまいりました。不登校経験のある生徒、発達障がい等の診断や、疑いのある生徒、様々な家庭環境から児童相談所の見守り対象になっている生徒、日本語によるコミュニケーション力が十分身につけていない生徒など、生徒の「困り」は多岐にわたり、生徒アンケートにおいてもおよそ7割の生徒が何らかの「困り」を感じていると推測されます。そのような「困り」を抱えた生徒たちの学習ニーズに対応するため、様々な研修会や学習指導の実践事例の積み上げや交流、また先進校に学ぶ取組などを行ってきました。教職員の負担感がないわけではありませんが、生徒の成長が教職員の達成感につながっていくものと考えております。また、平成30年度から高等学校においても通級による指導が本格的に実施され、本校も平成31年度入学生から年度進行で実施していきます。今年度までの取組が通級による指導においても活かされていくものと考えております。

ここに今年度の取組を報告書としてまとめました。本研究はまだまだ発展途上のものと考えておりますので、次年度以降さらに研究の精度を高めるためにも皆様の忌憚のないご意見、ご指導をお願いいたします。

京都市立西京高等学校定時制 副校長 中塚 洋

# 目 次

はじめに

I	学校の概要	3
1.	学校の基本情報	3
2.	学校の特色	6
3.	学校の現状と課題	6
II	調査研究の概要	8
1.	調査研究課題名	8
2.	調査研究のねらい	8
3.	調査研究の内容	8
4.	調査研究の校内組織	10
5.	調査研究計画（概略図）	10
III	調査研究の報告	11
1.	調査研究の目的および目標	11
2.	調査研究の内容および成果と課題	12
3.	調査研究の到達点	38
IV	次年度の課題	40
資料1	学習状況のチェック表	41
資料2	意識調査アンケート結果	42
	調査研究概略図	51

# I 学校の概要

## 1. 学校の基本情報

京都市立西京高等学校 定時制課程 設置学科：普通科

住所：京都市中京区西ノ京東中合町1

※ 全日制課程との併置校

### (1) 沿革

昭和10年10月	専修商業学校	( 高小卒, 4年制 )
昭和13年 4月	夜間商業学校	( " )
昭和16年 4月	京都市立第一商業学校第二本科	( " )
昭和23年 4月 1日	京都市立御池商業高等学校	(新制中学卒, 4年制)
昭和23年10月31日	京都市立西京高等学校定時制課程	( " )
昭和38年 4月 1日	京都市立西京商業高等学校定時制課程	( " )
平成15年 4月 1日	京都市立西京高等学校定時制課程	( 3年制, 4年制 )

### (2) 教職員数

職名	校長	副校長	事務長	教諭	常勤講師	養護教諭	非常勤講師	実習助手	事務職員	S C	S S W	管理用務員	夜間警備員	警備用務員	校医	歯科医	耳鼻咽喉科医	眼科医	薬剤師
人数	1	1	1	22	3	1	5	2	6	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1

※ S C : スクールカウンセラー, S S W : スクールソーシャルワーカー

### (3) 在籍生徒数 (平成30年5月1日現在)

	1 組			2 組			3 組			合 計		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
1年	8	10	18	9	9	18	9	9	18	26	28	54
2年	9	3	12	8	3	11	10	6	16	27	12	39
3年	6	4	10	8	4	12	7	5	12	21	13	34
合計										74	53	127

(4) 教育課程表 (平成30年度入学生用)

A コース

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
1	国語総合 3	国語総合 2	現代文 B 2	現代文 B 2
2		現代文 B 2	日本史 B 3 地理 B	化学基礎 2
3	現代社会 3			世界史 B 3
4		数学 I 3	数学 A 3	
5	生物基礎 2			数学 B 2
6		体育 3	地学基礎 2	
7	化学基礎 2			体育 2
8		体育 3	コミュニケーション 英語 II 3	
9	保健 1			家庭総合 2
10		美術道 I 2	コミュニケーション 英語 I 3	
11	コミュニケーション 英語基礎 3			家庭総合 2
12		社会と情報 3	美術道 II 2 情報処理 II 2	
13	総合基礎 1			総合進路 1
14		特別活動	特別活動	
15				
16				
17				
18				
19				
20				
21				
22				
23				
24				
25				

網掛けは、4修制を選択した場合の、第4学年での履修科目。

※ Aコース：普通科目の充実を図り、選択科目を多く配置することにより、発展的な興味や将来の進路の実現を積極的に支援するコース。

## B コース

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
1	国語総合 3	国語総合 2	現代文 B 2	現代文 B 2
2		現代文 B 2	〔日本史 A 2 地理 A 2〕	科学と生活 2
3	現代社会 3			世界史 A 2
4		数学 I 3	数学 A 3	
5	生物基礎 2			科学と生活 2
6		体育 3	体育 2	
7	保健 1			簿記 3
8		〔美術道 I 2 書道 I〕	コミュニケーション 英語 I 3	
9	コミュニケーション 英語基礎 3			家庭総合 2
10		社会と情報 3	簿記 3	
11	総合基礎 1			情報処理 2
12		特別活動	総合進路 1	
13	特別活動			特別活動
14		特別活動	特別活動	
15	特別活動			特別活動
16		特別活動	特別活動	
17	特別活動			特別活動
18		特別活動	特別活動	
19	特別活動			特別活動
20		特別活動	特別活動	
21	特別活動			特別活動
22		特別活動	特別活動	
23	特別活動			特別活動
24		特別活動	特別活動	
25	特別活動			特別活動

網掛けは、4修制を選択した場合の、第4学年での履修科目。

※ Bコース：普通科目の学習のほかに、情報処理や簿記などの商業科目を重点的に学習し、資格取得も可能にするなど実社会に即応できる力を養うと共に個性や向上心の伸長を積極的に支援するコース。

## 2. 学校の特徴

西京高校は京都市西部に位置し、京都市営地下鉄西大路御池駅前に立地する。交通の便が良いことから、地下鉄沿線である醍醐・山科方面、阪急京都線沿線である向日市・長岡京市方面、JR嵯峨野線沿線の亀岡市・南丹市方面など、京都市中心部以外にも広い地域から生徒が通っている。

市内定時制高校で唯一、長期欠席者を対象とした選抜試験を実施している。また、単位制に移行する定時制高校が多い中、学年制による教育課程を展開している。

### (1) 3年間で卒業できる教育課程

本校は、入学生全員が3年間での卒業を目指す教育課程で学習をする。「午後から始まる高校」として始業時間を少し早め、1日の授業時間は午後4時20分からの5時限を基本とし、2年生からはさらに早い午後3時30分から6時限授業を行う日もある。

### (2) 少人数によるクラス・講座編成

1クラスの人数や授業講座の人数を20名以下の少人数で編成している。教員にとっては生徒一人一人にきめ細かい指導ができ、生徒にとっては疑問点や不明点について気軽に質問ができるアットホームな雰囲気の中で授業が展開されている。数学や英語などの授業の一部および情報関連の授業ではチームティーチングを実施している。

### (3) 定時制専用教室

定時制課程は全日制課程とは別に単独のエリアを有しており、ホームルーム教室をはじめ単独で使用できる教室を有している。そのため、「自分の机・自分の教室」があり、いつでも自由に学習に取り組むことができる。学習が苦手な生徒に対しての補習、進路目標に向けての補習や生徒の自主学習に積極的に活用している。

### (4) 2年生からのコース選択

本校はコース制を採用しており、2年生からAコースまたはBコースを選択する。進学から就職まで生徒の進路希望や興味関心に応じて幅広く学習をすることができる。特にBコースでは簿記や情報関係の資格取得にも取り組んでいる。

## 3. 学校の現状と課題

### (1) 近年の定時制高校に期待される役割の変化

定時制高校は、従来の勤労青少年に対する学習の場としての役割だけでなく、不登校

経験のある生徒や特別な支援を要する生徒の増加に伴い、多様な学びの動機や学習歴を有する生徒の学習保障の場として重要な役割を担うなど、その役割が大きく変化している。

## (2) 京都市立高校における、定時制課程在籍生徒の状況

中学校在学時の不登校経験者の割合は55%～60%に達し、発達障がいを抱えていると思われる生徒の割合も12%近くを占める。また、その他様々な環境等に伴う「困り」を抱える生徒が増加している。

中途退学率、原級留置率はいずれも10%程度で推移しており、多様化する生徒たちのニーズにきめ細かく対応することが急務となっている。

## (3) 西京高校定時制の現状

募集定員の5分の1程度を中学時に年間30日以上欠席がある生徒を対象とした「長期欠席者特別入学者選抜」で合格させており、一般の選抜合格者も含めて在校生に占める不登校経験生徒の割合は60%近くに上る。在校生のうち、生活保護家庭、児童相談所の見守り、発達障がいの診断や疑い、ひとり親家庭など、「困り」を抱えた生徒が約80%に上るのが現状である。

生徒の「困り」を解消・軽減するため、平成28年度から「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の調査研究において、スクールカウンセラー（以下、「SC」という。）およびスクールソーシャルワーカー（以下、「SSW」という。）と協働し、個々の生徒のニーズに応じた支援を可能にする校内体制作りに関して調査研究に取り組んできた。二年間の研究で一定の校内体制の形は見えてきてはいるが、より実効を伴う支援を行っていくためには、さらなる研究が必要である。特に、校内体制が整い適切な時期に適切な支援を行うことで環境や特性に関する「困り」が解消に向かっても、学力不振から脱却できずに中途退学や原級留置となる生徒が無くなるわけではない。そうした生徒が進級・卒業していくためには、個々の状況に応じた学習指導が必要となり、あわせて学習目標の達成度合いを評価する評価法の改善または新規の作成が必要となる。

## (4) 西京高校定時制が抱えている主な課題

発達障がいがある生徒について、特性を踏まえた学習指導が組織立って構築できていない。また、小学校・中学校で長期欠席（不登校）があった場合の未学習内容についての学習指導についても教員個々の対応となっており組織的な方策が作れていない。

外国人生徒の数は少ないが、ごく短期間の中学校在学（日本滞在）を経て入学してくるケースが生じており、日本語能力の問題など、その学習指導に苦慮している。



## Ⅱ 調査研究の概要

### 1. 調査研究課題名

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、  
個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立  
～社会でより良く生きていく力をつけるために～

### 2. 調査研究のねらい

不登校経験生徒、発達障がい等の診断を受けている生徒や診断は受けていないが疑いのある生徒、生活保護の対象家庭の生徒や児童相談所の見守り対象になっている生徒などの、特性や環境に関する何らかの「困り」を抱えた生徒の中には、学力不振を理由として中途退学や転学、原級留置となる生徒が少なくない。また、日本語によるコミュニケーション力が十分身につかないまま入学してくる外国人生徒に対して、日本語運用能力の向上と並行して高等学校の学習内容に対応させる必要があるケースも生じている。

「困り」のあるこれらの生徒を、多様な学習ニーズを持つ生徒と位置づけて焦点化し、確かな学力を身につけて社会で生きていく力をつけるための学習指導法の開発を目標として調査研究に取り組んだ。

調査研究のねらいとして、次の2つを設定し、学習態勢確立のための支援方法および支援体制を策定したのち、その体制のもとで学習指導法ならびに評価方法を確立していくための調査研究を行うこととした。

#### (1) 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の具体的策定

SCやSSWと協働しながら支援する校内体制の充実に伴って、生徒の「困り」に対するアセスメントと対処の精度を高めて「困り」を解消する支援方法を確立することで、学習態勢を整える。

#### (2) 学習指導方法と評価方法の確立とその実施のための校内体制構築

学習障がいがある生徒や不登校経験のある生徒など、多様な学習ニーズに即した学習指導法と評価方法の確立およびその実施のための校内体制を構築する。

### 3. 調査研究の内容

生徒の「困り」を解消・軽減するため、平成28年度から「多様な学習を支援する高等学

校の推進事業」の委託を受けて2年間行ってきた調査研究を、「生徒の学習態勢確立のためにSCやSSWと協働しながら支援する校内体制の構築」として拡張した上で、その成果を踏まえて多様な学習ニーズに応じた学習指導法を確立するために、以下の項目について調査研究を行う。

#### (1) 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の策定

- (a) SCおよびSSWとの協働体制のもとで、生徒情報の機能的な収集・管理・共有・活用と効率的なケース会議の開催を通して、生徒のアセスメント機能を強化し、学習態勢確立に向けた支援等につなげる。
- (b) ソーシャルスキルトレーニング（以下、「SST」という）の具体的な実施方法について確立する。

#### (2) 学習指導法ならびに評価方法の確立

- (c) 発達障がい要因とする学力不振への対処法や、そのような生徒の学習指導法及び評価方法について確立する。
- (d) 不登校を経験した生徒の未学習への対処法や、そのような生徒の学習指導法及び評価方法について確立する。
- (e) 日本語運用能力が不足している外国人生徒に対して(c)(d)の指導法及び評価方法を応用することを研究する。

#### (3) 教職員の知識・理解の深化

- (f) 平成28年度から2年間の調査研究にともなって培われた教職員の知識をより深化させながら、新たな課題についての基礎的知識等を養う場として教職員の研修を実施するとともに、先進校の視察等による事例研究を行う。

#### (4) 校内体制を確立するための人材育成

- (g) 校内体制を確立するために次のような人材の育成が必要と考える。
  - ・ 発達障がいがある生徒や不登校を経験した生徒、外国人生徒の学習指導を校内で円滑に行うため、主導的立場で取りまとめる人材。
  - ・ SCおよびSSWを校内の一員として協働する意識と支援に対する知識や考え方を持った教職員。
  - ・ 教職員と共に「困り」の解消に取り組めるSCやSSW。
  - ・ 「ケース会議」を円滑に進行させるために教職員とSCおよびSSWの信頼関係を構築し、SCやSSWを校内で有効に機能させる「支援コーディネーター」。

※「支援コーディネーター」：「特別支援教育コーディネーター（京都市での呼称：総合育成支援教育主任）」を、昨年度までの研究成果として「支援コー

ディネーター」と呼称することとして以下のように定義した。

- 特別支援教育コーディネーターとしての本来の役割にとらわれずに、生徒に対して直接支援を行う教職員（担任や教科担当等）の活動を、校内の各分掌や教職員（SC・SSWという専門職を含む）と協働しながら多面的に支え、調整する者として位置付ける。
- 主たる役割として「ケース会議等支援に係わる会議の招集と主催および進行」「SC・SSW、総合育成支援員等非常勤職員との情報交流と共有および勤務日程の調整」を担う。
- 教育支援部の一員としての役割「生徒情報の収集・整理」「関係教職員間での情報共有」も担う。

#### 4. 調査研究の校内組織

研究指定実行委員会（校内呼称）

氏 名	職 名	校務分掌・担当教科等
中塚 洋	定時制副校長	
澁谷 賢一	教 諭	教務部 教務主任 理科
八木 幸一郎	教 諭	生徒部 生徒指導主事 国語科
宮崎 泰光	教 諭	進路部 進路指導主事 公民科
椿 浩子	教 諭	保健給食部 保健主事 英語科
小野 潔	教 諭	教育支援部 部長 数学科
山根 明子	養護教諭	保健給食部
十河 博子	スクールカウンセラー	
三木 泉	スクールソーシャルワーカー	

#### 5. 調査研究計画（概略図）

巻末に資料として掲載

### Ⅲ 調査研究の報告

#### 1. 調査研究の目的および目標

入学してくる生徒たちの半数以上が、生活保護や児童相談所の見守り対象など、家庭環境に「困り」を抱えており、外部機関との連携が必要な状況である。これら入学生生の状況について、中学校からの聞き取りや保護者面談等で情報を得、その情報の有効活用と予防的な支援対策実施の緒に就いたところである。

生徒情報の「効果的な収集」と「適切な共有」を図り、SCおよびSSW等の専門職とも情報を共有しながら協働することで、個々の生徒への対応を計画的に実行していく「ケース会議」の開催システムの確立に取り組み、その成果が上がりつつあるところである。

しかし、適切な支援を行うことで環境や特性に関する「困り」が解消に向かっても、学力不振から中途退学や原級留置となる生徒がいる。そうした生徒には、個々の状況に応じた学習指導とあわせて評価法の改善または新規の作成が必要となる。しかし、現状は各教員の経験に頼った対応にとどまっており、より組織的かつ持続可能な方策の策定が求められる。

##### (1) 目的

本調査研究においては上記の「適切な支援を行うことで環境や特性に関する『困り』が解消に向かっても、学力不振から中途退学や原級留置となる生徒」の解消を目指して、組織的かつ持続可能な「学習指導法」と「評価法」の改善または新規の作成を目的とした。

##### (2) 目標

目標としては、次の2点を設定した。

###### 目標1 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の具体的策定

個々の生徒が学習に臨む態勢を整えることができるように、そのニーズに応じて教員が適切に支援できる校内システムの構築に取り組み、教職員とSCやSSWとが一体となって、それぞれの専門性を活かした効果的かつ効率的な連携のあり方を策定する。

###### 目標2 学習指導方法と評価方法の確立

生徒個々のニーズに応える学習指導法の開発にあたり、「発達障がいがある生徒を対象とした特性を踏まえた学習指導法」「小学校・中学校で長期欠席（不登校）があった生徒を対象とした未学習内容を補充しながらの学習指導法」について事例を蓄積し分析する。

学習目標の達成度合いを評価する評価法については、個々に応じた学習指導法に適応しながら他の生徒の評価との整合性を持たせた評価法を策定する。

また、上記の目標に付随して次の2点を目指した。

### 目標3 支援を支える教職員の知識・理解の深化

前年度までの2年間の調査研究を通して、研修等による教職員の知識や理解は深まり、意識の変革も進んできた。本研究においてはさらなる向上を目指して、引き続き校内での研修会の実施や、先進的な取組をしている他校の視察を計画する。

### 目標4 校内体制を確立するための人材育成

「困り」のある生徒が学習態勢を整えるための支援および実際の学習指導が校内で円滑に行われるよう、主導的立場で取りまとめる人材の養成を図る。特に、学習態勢の構築に関しては、「ケース会議」を円滑に進行させるために教職員とSCおよびSSWとの信頼関係を構築し、SCやSSWを校内で有効に機能させる人材を「支援コーディネーター」として養成を図る。

SCやSSWについても、教職員と共に「困り」の解消に取り組めるように学校組織や生徒指導についての知識を共有できるよう図る。

## 2. 調査研究の内容および成果と課題

### (1) 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の具体的策定

平成28～29年度の2年間にわたって取り組んだ文部科学省委託事業「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」での成果をもとに、現在、以下のような取り組みが整備されているが、それぞれ残された課題も多い。

#### (1)-1 「支援コーディネーター」

##### ◇ 取組内容

「特別支援教育コーディネーター（京都市での呼称：総合育成支援教育主任）」を「支援コーディネーター」と呼称することとして、昨年度までの研究成果として以下のように定義した。

- 本来の役割にとらわれずに、生徒に対して直接支援を行う教職員（担任や教科担当等）の活動を、校内の各分掌や教職員（SC・SSWという専門職を含む）と協働しながら多面的に支え、調整する者として位置付ける。
- 主たる役割として「ケース会議等支援に係わる会議の招集と主催および進行」「SC・SSW、総合育成支援員等非常勤職員との情報交流と共有および勤務日程の調整」を担う。
- 教育支援部の一員としての役割「生徒情報の収集・整理」「関係教職員間での情報共有」も担う。

本研究では、実際にこの位置づけと役割のもと生徒支援が円滑に行えるかどうかについて確認と検証を行うこととした。

#### ◆ 本年度の成果

教職員間での認識は一定深まり、「支援コーディネーター」への情報提供や専門家との連携の相談等、上記の様に定義して目標とした役割を果たせるような状況が整ってきている。

#### ■ 次年度への課題と改善への展望

「支援コーディネーター」が特別な力量のある教員にしか務まらないということでは、担当者の固定化、あるいは人事異動等による人材の枯渇等が危惧される。

したがって、“マニュアル化”が以前からの目標であった。しかし、その活動内容を文字化して次期担当者に伝達できるような形には依然として至っていない。今後、早急な対応を検討する必要があると考えている。

### (1) - 2 SCおよびSSWとの協働体制の充実

#### ◇ 取組内容

SCとSSWの勤務形態は原則として次の通り。

	月	火	水	木	金	
SC	○			○		年間560時間
SSW				○		年間280時間

※ 勤務日については終日勤務が基本。

#### ◆ 本年度の成果

SCとSSWが同一日に勤務する曜日をつくることで、学校の教職員との情報共有・交流が効率的に行えることはもちろん、両者相互の情報交流やアセスメントにおける意見交換等ができており、協働の体制としては充実したものとなっている。

#### ■ 次年度への課題と改善への展望

週に一度のみ来校するSSWについては情報共有にかかる時間の必要性から、来校日を増やすことができるかが今後の課題である。

先進校の視察例ではSSWの方がSCよりも来校日数が多かった。しかし、生徒や保護者からの需要を考慮するとSCの来校日数を減らすことは論外であり、SSWの来校日を少なくともSCと同等にすることは検討すべきである。

### (1) - 3 生徒情報の収集・管理・共有・活用

#### ◇ 取組内容

- ① 入学までの情報収集

### ①-1 中学校との連携

本校合格後、遅くとも3月末日までに情報共有を行っている。京都府下の中学校については可能な限り直接訪問し、進路指導主事や担任等の関係教員から入学予定者の情報を収集している。ただし、他府県の中学校については、電話等での情報共有にとどめている。

### ①-2 入学予定者面談

入学式前に面談の期間を3日間設け、入学予定者本人と保護者に来校を求めて面談を実施している。一般的な面談は担任予定者が行き、引き続き別室において養護教諭と教育支援部長から健康面等を中心とした面談を実施している。

養護教諭と教育支援部長との面談は、事前に配付して記入・回答の上で持参することを求めていた「保健調査票」および「一人ひとりに応じた支援を行うためのアンケート」をもとに行う。特にアンケートは、書くことで伝えてもらえるような事情の把握や本人の気になるところを見出す材料としている。

## ② 入学後の情報収集

学校生活の様々な場面で教員が気付いた事柄については担任に情報が集まってくる。また、保健室で把握したり育成支援員が把握したりする情報も多い。その中から、必要に応じて「支援コーディネーター」と情報共有・交流が行われる。また、「支援コーディネーター」の方から担任や保健室等に情報交流の働きかけも行う。

さらに、気になる生徒にはSCとの面談を勧めたりして話を聞くようにしている。

これらの活動を通して入学時には把握できていなかったような事情が分かってくることが多い。

さらに、全教職員に対して、日常において気づいたことなどを記録ファイル（PC上の入力シート）へ記入してもらうよう呼び掛けている。

## ③ 情報の管理

①で得られた情報は、一旦、学年ごとに作成した生徒情報のデータベースに入力する。そこから生徒一人一人の「プロフィールシート（校内呼称）」という個人情報票が出力できる。この個人情報票は、後に記述するケース会議等で生徒の情報を共有して現状をアセスメントする資料として用いる。

②で収集された情報は、上記のデータベースをアップデートしていくために入力することになる。

データベースのサーバ内の保存場所は、アクセス権のある教職員を限定し、ファイルにはパスワードをかけての保存となる。

## ④ 情報の共有・活用

毎週1回開催する支援委員会において情報の共有の機会を持つ一方、必要な案件については随時ケース会議を開き、教職員間の情報共有を図る。

必要に応じて情報は活用できるが、デジタルデータの閲覧は上記③のように限られた

教職員のみ許可されるため、印刷した「プロフィールシート」を施錠されたロッカー内に保管して、必要な教職員には閲覧可能としている。

#### ◆ 本年度の成果

過去2年間の研究の成果として上記の様な形態が整い、情報を集めて、適切な管理のもと活用する体制は整ってきた。

#### ■ 次年度への課題と改善への展望

入学後の情報収集手段の一つとして記録ファイルへの記入を呼び掛けているが、あまり進まないのが実態である。教職員のちょっとした気づきは普段の会話の中で多く出るが、その場で消えてしまうことも多い。

また、「プロフィールシート」への新情報の入力や既に入力された情報の修正等は、SSWの協力を得ながら「支援コーディネーター」が行うが、集約しきれていない情報も多いと考えられる。

したがって、教職員の気づきのような情報を記録していき、「プロフィールシート」の更新に効果的な簡便な記録の方策を検討する必要がある。

さらに、共有という面では会議等の場を設定する取組も行っているが、ロッカーを開錠してファイルを閲覧するのは気軽に利用しにくい面がある。「知りたいと思ったことがすぐ分かる」方策についてもさらなる改善が必要である。

### (1) - 4 ケース会議の開催を通じた生徒のアセスメント機能強化

#### ◇ 取組内容

ケース会議については、必要な場合に適切に行えるよう、開催形態（特に構成メンバー）を「支援コーディネーター」の裁量で行えるようにした。

アセスメントシートによる視覚的な情報共有を行いながら生徒の「困り」について“見立て（アセスメント）”をして“対策（プランニング）”することを前提とするが、生徒によっては把握できている情報（成育歴や家族の関係性等）が不十分な場合も多く、十分なアセスメントができない場合が多い（「困り」がある生徒ほど情報が不足していることが多い）。したがって、「プロフィールシート」の完成度やアセスメントシートの活用の有無などについては柔軟な対応としている。

#### ◆ 本年度の成果

アセスメント機能強化という観点においては、ケース会議の開催形態という点や会議でいかに正確なアセスメントができるかという点などが取組のポイントである。

会議開催という点においては、柔軟な形態で開催できSCやSSWという専門職を含めた生徒対応のケースが徐々に増加している。

#### ■ 次年度への課題と改善への展望

正確なアセスメントという点においては、上述のように「困り」のある生徒ほど十分



なアセスメントができないことが多い。したがってプランニングもそこから判断できるまでの内容にとどまりがちである。

事例を重ねると、会議そのものより会議以前に生徒の情報収集がどこまでできているかの重要性を強く感じるが多かった。

上述のように、家庭環境等が要因で十分な情報が得られていない場合が多く、このようなときにどのようにして情報収集を行うかは今後の課題である。

また、アセスメントの機能の強化は生徒の学習態勢を整えるうえで適切なプランニングを行うために必要なことであるが、実際のプランニングの評価を十分に行うことができておらず、具体的な支援を行った後、その適否を評価して次のアセスメントとプランニングに繋げるサイクルの構築が今後の課題である。

### (1) - 5 SSTの具体的な実施方法

#### ◇ 取組内容

##### ① 1年生「総合基礎（総合的な学習の時間）」における取組

今年度より、次の2つを目的としてコーピングの手法を取り入れた取組を始めた。

- 生徒が自分自身のストレスに対処し、学年・クラスなどで適切な人間関係を築いて成功体験をすることにより「心のエネルギー」を高め、学び方やものの考え方の多元性を身に付けさせること。その結果として学習活動や部活動をはじめ学校生活全般に主体的に参加する態度や能力を身につけさせること。
- 自己理解を深めるとともに自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく生きる力を育成すること。

また、生徒理解のための情報取得の手段として試行していたK J Qマトリックスの結果をこの取組において活用した。

※ K J Qマトリックスは早稲田大学人間科学学院の菅野純氏と教育現場に立つ教師が共同で開発した教材。「こころの土台」を構成している「こころのエネルギー」の充実度と「社会生活の技術」の成熟度の測定をする。

毎回の授業計画については、S Cが監修を行った。授業にも可能な限り参加し、3回程度、心理教育を行った。

年間の計画は次表のとおりである。

4月～ 5月	<b>【導入のエクササイズ】</b> 自分の行動パターンを知り、この授業で自分がどう変わりたいのか、年間の見通しを持つ。
5月～ 7月	<b>【認知のエクササイズ】</b> 人との関係でストレスを感じたとき、どうしたら楽な気持ちになれるのか、その方法を学ぶ。

9月～ 10月	【行動のエクササイズ】 会話のコツ，自分の気持ちの伝え方など，お互いのストレスを小さくして人間関係をつくる方法を学ぶ。
11月～ 1月	【情動のエクササイズ】 自分で自分の身体と心を楽しんで，ストレスを小さくするリラックス法を練習する。
1月～ 2月	【総合のエクササイズ】 1年間の学習を振り返り，日常生活に活かす総合的な練習をする。

② 2年生「総合進路（総合的な学習の時間）」における取組

全国高等学校進路指導協議会編の「高校生のキャリアノート」（実務教育出版）より，

「20. コミュニケーションスキルズ」

をテキストに用い，次表の内容を扱った。

9月下旬 ～ 10月中旬	【コミュニケーションスキル】  「コミュニケーションとは」 コミュニケーションとは何かを学び，自身のコミュニケーション力をチェックする。  「話し方トレーニング」 お互いを大切にする話し方について学ぶ。  「聴き方トレーニング」 気持ちをくんだ聴き方について学ぶ。  「観方トレーニング」（ロールプレイ） 情報や感情をとらえる観方について学ぶ。  「伝える力をつける」 地図による道案内を発表する。
--------------------	--

◆ 本年度の成果

1年生の取組では，本校の生徒の多くが苦手とするグループワークが，経験を重ねることによってできるようになる生徒が増えてきた。また，全ての生徒とまではならないが，自己理解が進んだ生徒や自己表現ができる生徒が増えてきたことも大きな成果である。K J Qマトリックスの第1回（年度当初に実施）の結果と第2回（12月に実施）の結果を比較しても，総じて「こころのエネルギー」が向上している傾向が見られ，今年度の取組に効果があったことが認められる。さらに，S Cが授業に参加することは，生徒がS Cに馴染む機会となり，例年よりも相談場面が増える効果につながった。

2年生の取組としては，上記のテキストを使用して取り組んだのは今年度が2年目であった。最後の発表の課題では，あまりしゃべらない生徒が発表するなど，普段見せないような面を見せるといった効果が表れており，取組は充実してきている。

## ■ 次年度への課題と改善への展望

1年生の取組では、入学直後の授業において自己理解をすることそのものに抵抗を示し、授業への出席を拒む生徒が出るなどが見られたので、年度当初の授業のやり方については改善の余地がある。

2年生の取組は、上記の様に現行内容において一定の効果が認められている。今後は、より時間をかけて深く掘り下げた取組など、充実策を講じていきたい。

## (2) 学習指導方法と評価方法の確立

### (2) - 1 学習指導方法の確立

#### ◇ 取組内容

研究初年度である今年度は、「① 学習障がいの診断を受けている生徒」と「② 不登校の経験により未学習があると考えられる生徒」の中から、それぞれ5名ずつを対象生徒として抽出し、指導事例（「成功した指導法」「上手くいかなかった指導法」「学習における困り」など）を蓄積し、その事例から適切な指導法の開発を目指した。

学習指導面については課題が顕著ではないことがはっきりとした生徒がいたり、残念ながら年度途中で登校が困難になる生徒がいたりして、最終的には前者が3名と後者が2名の合計5名の生徒について事例蓄積と情報交流等を行った。

なお、年間のスケジュールは以下のように取り組んだ。

- 1) 該当生徒について、1学期の指導における「学習において困りがあった事例」や「成果のあった指導例とその成果の具体的事例」等について報告。
- 2) 報告のあった事例等に考察を加えて、2学期当初に全教職員での情報共有と意見交流の会を開催。
- 3) 意見交流を経て個々に応じた学習指導法の検討を行い、2学期の授業にて試行。
- 4) 2学期の学習成果（成績等）から、3学期当初に指導法の適否を検証する会を開催。改善の必要がある場合はその方策を検討し、3学期の授業にて試行。
- 5) 年度末にそれぞれの指導法を評価し、次年度の指導法につなげる。

結論から述べると、研究初年度である今年度は目標とした学習指導法の一般化には到達しなかった。個々の生徒の事情も異なり、普遍的な指導法の開発までは至らなかった。また、日本語運用能力が不足している外国人に対する指導法の活用も同様に研究にまで至らなかった。

#### ① 「学習障がいの診断を受けている生徒」

ある生徒は、

「作業に時間がかかるため、他の生徒と同様に作業が行えないことがある。例えば、板書をノートに書く時間がかかり授業時間内に終わらない。」

という「困り」があった。それに対して、

「授業時間内にノートに書ききれない板書は、貸し出したタブレット端末で撮影して放課後等にノートに書き写せるように配慮したり、指示を出す際は、具体的に出すことを心掛けたりする。」

といった取組を行った。

結果として、入学当初はできなかったようなこともできるようになる等の変化が見られるようになった。板書の工夫や授業の進行速度の調節などが功を奏したと考えられるが、タブレット端末は不要となった。以降は、特別な支援を行っていくという形ではなく、このような板書と授業の工夫や、指示を出す際の注意を継続しつつ、本人のペースを見守り、注視していくこととした。現在も順調に学校生活を送ることができている。

## ②「不登校の経験により未学習があると考えられる生徒」

不登校経験のある生徒については、12ページからの(1)に記したような支援により学習態勢が整うと学校生活が継続できるようになってくると考えている。以下の点は、ある程度本校の「経験則」のようなところもあるが、例えば、学習内容の到達点を過度に高く設定せず、高校で学習する内容の基礎基本を丁寧に学ばせることで授業が成立していることであったり、数学や英語のように中学校までの学習内容の積み上げが特に必要な科目については復習をしながらの授業を行っていたりする。また、必要に応じて課外の補習（呼び出されているという生徒の抵抗感を減らす意味から「勉強会」と呼称している）や個別の対応も行っている。

こちらも一般化した対策としてはあげにくい、「適切な学習目標」と「丁寧な個別対応」が根幹としてあると考えている。

## ◆ 本年度の成果

①に例示した生徒のように、個々の生徒の「困り」によって対応は様々で指導法も個別的である。したがって、一般化にまでは至らなかった。しかし、ある生徒に効果がある取組は他の生徒にとっても有効であると考えており、今年度の取組も多くの生徒の学力保障に役立つ部分があったと考える。

## ■ 次年度への課題と改善への展望

今年度の取組を受けて、来年度は各生徒の変化の様子を具現化することができないかと考えている。そのための具体的なチェック項目を作り次年度に備えている。(資料1)

また、今年度は「発達障がいの診断を受けている生徒」を対象に研究を行ったが、実情としては「診断を受けていないが疑わしい生徒」が少なくない。このような生徒にも同様の個別対応をしているが、普遍化が可能であれば調査研究の対象としたい。

## (2) - 2 評価方法の確立

### ◇ 取組内容

評価方法については、検討を行うまで至らなかった。次年度以降の課題である。

### (3) 支援を支える教職員の知識・理解の深化

#### (3) - 1 研修を通じた教職員の知識・理解の深化と意識の変革

##### ◇ 取組内容

今年度は、校内で8回の研修会等を開催した。

平成30年

##### ① 5月31日(木) 教職員研修会

「平成30年度1年生対象 第1回 K J Qマトリックスの結果報告」 実行委員会より  
内容：1年生対象に実施した第1回目のK J Qマトリックスの結果について、どのように見るかという見方の理解と結果の分析（クラスごとの傾向等）を実施。また、生徒に対して取れる具体的手立て等についても検討。

##### ② 8月29日(水) 教職員研修会

「1年生総合基礎（コーピング）に関する意見交流」 実行委員会より  
内容：1年生を対象に本年度開始した総合的な学習の時間「総合基礎」について授業内容の共有と意見交流。

「第1回意識調査アンケートの結果報告」 実行委員会より

内容：学校生活についてのアンケート結果を教職員間で共有し、教育内容の向上や調査研究の改善を図る。

##### ③ 9月20日(木) 教職員研修会

「児童相談所との連携について」

講師：三木 泉 氏 本校SSW

十河 博子 氏 本校SC

内容：「児童相談所とはどのような機関なのか」「どのような生徒が関係を持つことになるのか」

「学校がどのように関わりを持つのか」等についての認識の深化を図る。



##### ④ 10月4日(木) 情報共有・意見交流会

「発達障がいがある生徒・不登校経験がある生徒の指導について」 実行委員会より

目的：学習指導法の開発に当たり、対象生徒を絞ったうえで授業における状況や指導上工夫していることなどを共有・交流する。

##### ⑤ 10月12日(金) コンサルテーション

講師：竹田 契一 氏 大阪教育大学名誉教授・大阪医科大学LDセンター顧問  
京都市教育委員会指導部顧問

内容：「困り」がある生徒について、生徒の状況の見立てや対応等についての助言を受ける。

⑥ 11月29日（木） 教職員研修会

「ソーシャルスキルトレーニングについて」

講師：十河 博子 氏 本校SC

内容：ソーシャルスキルトレーニングについての理解を教職員間で深めることで生徒支援の向上に資する。

平成31年

⑦ 1月10日（木） 情報共有・意見交流会

「発達障がいがある生徒・不登校経験がある生徒の指導について」 実行委員会より

目的：10月の共有・交流の会以降の各生徒の指導状況について共有・交流する。

⑧ 3月20日（水） 教職員研修会 / 情報共有・意見交流会

「平成30年度1年生対象 第2回 K J Qマトリックスの結果報告」 実行委員会より

内容：1年生対象に実施した第2回K J Q調査の結果について、第1回調査の結果からの変化、および変化の理由についての分析を実施。また、コーピングの授業の生徒への効果についても検証する。

「第2回意識調査アンケートの結果報告」 実行委員会より

内容：学校生活についての第2回アンケートの結果を教職員間で共有し、第1回の結果との比較等を行い、次年度以降の教育内容の向上や改善を図る。

「発達障がいがある生徒・不登校経験がある生徒の指導について」 実行委員会より

目的：今年度の取組状況のまとめを共有・交流する。

◆ 本年度の成果

研修会そのものの回数が多いとはいえ、外部からの講師を招いての研修も1回だけであったが、日々の実践等の経験により、教職員の知識や理解は深まっていると考えられる。また、生徒についての意見交流会等の取組により生徒支援への認識の変革が進んでいると考えられる。

また、今年度より新たに着任した教職員が知識・理解を進めるだけでなく、本校の取組を伝える機会としても機能したと言える。

■ 次年度への課題と改善への展望

研修会等による知識・理解の深化は一定程度深まったと考えられるので、今後はその知識を実際の場面に活かせるような取組を計画し、実践力の向上に軸足を移していくべきであるとする。そのための機会を意図的に企画することも検討したい。

(3) - 2 先進校視察による教職員の知識・認識の深化

◇ 取組内容

学習指導において特色のある取組を行っている高校を中心に5校を訪問。学習指導における工夫や特色、学び直しや自立支援（基礎学力向上、社会性や人間関係形成力や協

働力などを育む) についての取組等の知見を広めることを目的に実施した。

平成30年

- ① 10月18日(木) 西日本短期大学附属高等学校
- ② 10月19日(金) 長崎玉城高等学校
- ③ 12月11日(火) 神奈川県立横浜翠嵐高等学校

※ 日本語運用能力が不足している外国人生徒の学習指導法の取組も視察

- ④ 12月12日(水) 東京都立蒲田高等学校
- ⑤ 12月12日(水) 神奈川県立釜利谷高等学校

#### ◆ 本年度の成果

学習指導の取組について、参考となる特色のある高校を選んで訪問した。そのため、定時制課程よりも全日制課程の高校を多く訪問する結果となった。

それぞれの取組の中には本校でも似たような内容に取り組んでおられる部分も多くみられ、意を強くすることもあった。

一方で、学習指導面で自学自習課題の活用や、外国人生徒への指導を小中学校において未学習がある生徒への学び直し指導に繋げる取組、また、評定のみで成績をつける方法から観点別評価への変更など参考となる事例を多く得られた。

進路指導面において、地域のサポートステーション活用といった外部機関との連携の取組が行われている学校があった。京都市の「若者サポートステーション」も利用規定が改められ、定時制については在校生も利用可能となったので、本校も連携を充実させていくべきであると実感できた。

#### ■ 次年度への課題と改善への展望

引き続き他校の実践事例に学べるところは学んでいきたいと考えている。今年度は全日制課程の学校への視察が多くなったので、次年度は本校により近い定時制課程における取組を学ぶ機会を設けたい。

### (4) 校内体制を確立するための人材育成

#### ◇ 取組内容

前述のとおり、平成28～29年度の2年間にわたって取り組んだ「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」を通して、一定の人材育成は進んできたと考えられる。

本調査研究に際して、「支援コーディネーター」については前年度までに位置づけた役割のもと生徒支援が円滑に行えるかどうかについて確認と検証を行なった。

また、教職員についても、前年度までにSCおよびSSWを校内の一員として協働する意識と生徒支援に対する知識については一定の向上を図れてきた。さらに日々の実践や研修等を通じた意識・知識の深化を図った。

## ◆ 本年度の成果

「支援コーディネーター」については一定の役割が教職員間にも浸透し、生徒支援が進んできたと考えられる。同時に、教職員の意識や知識についても深化が進み、転任等で今年度より新たに加わった教職員への啓発も研修等を通して行えた。

SCとSSWについては、もとより生徒の支援を第一に考えてその勤めを果たしてもらっているが、教職員の意識や知識の深化に伴って各ケースにおける該当生徒の担任との連携などを一層明瞭にして取組を進めることができた。

## ■ 次年度への課題と改善への展望

既述のとおり「支援コーディネーター」担当者の固定化や人材枯渇に対処するための「マニュアル化」が実現していない。次年度の検討課題であると考えている。

## (5) 調査研究の評価基準となる指標

次の二つを指標として調査研究の評価を行うこととした。

### ① 生徒の進級率や欠席日数、平均評定等の数値

学習指導法の適否を評価する。

### ② アンケートによる意識調査

教職員の達成感の向上と負担感の軽減、生徒および保護者の学校への信頼感などを評価する。

## (5) - 1 生徒の進級率・欠席日数・平均評定等

### ◇ 取組内容

進級率・欠席日数・平均評定等の数値による評価については、研究2年目以降に複数年の数値比較により行いたい。

## (5) - 2 アンケートによる意識調査の結果

### ◇ 取組内容

アンケートについては、生徒・保護者・教職員を対象に実施している。

第1回アンケートは6月から7月にかけて実施し、第2回アンケートは12月から1月にかけて実施した。

アンケートの設問は変化の様子を図るため、2回とも同じ設問で実施している。

また、一部の設問については昨年度まで二年間取り組んだ研究において実施した設問と同じものとした。これにより長期間の変化を比較した研究成果の検証も試みたい。

なお、アンケートの全集計結果については、巻末に資料として掲載した。(資料2)



## 1) 教職員対象

対象：定時制教職員

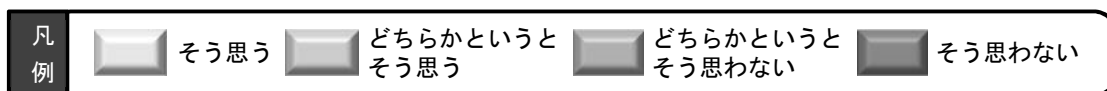
(副校長，教諭，常勤講師，実習助手，養護教諭 計29名)

実施日：第1回 平成30年6月20日

第2回 平成31年1月16日

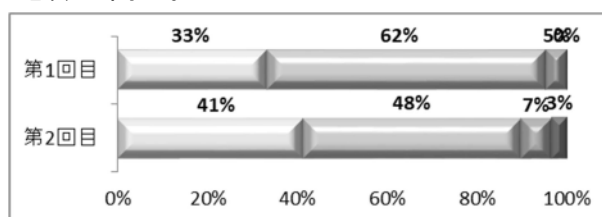
回収数：第1回21名

第2回29名



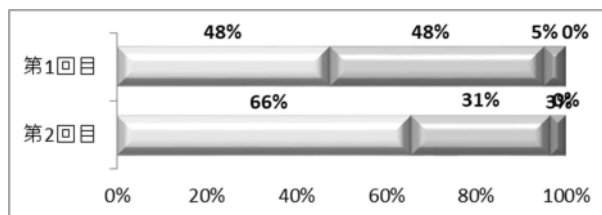
### 設問1. 支援教育を推進しようという教職員の意識は高い。

グラフ上では、推進していこうとする意識の割合が若干後退しているように思われるが、第2回目はアンケートの回収率が1.4倍増えており、回答数から判断すると、強い肯定意識を持つ教職員数が増えていることがわかる。



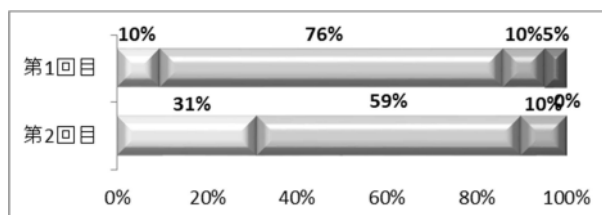
### 設問2. 教職員に対して支援教育に関する理解啓発が進められている。

強い肯定感を持つ教職員が増えていることから、理解啓発が適切に行われており、また浸透していることがうかがえる。



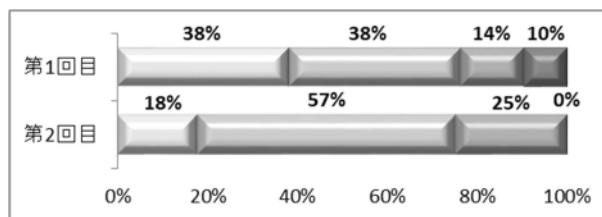
### 設問3. 学校で行っている支援は、生徒の教育的ニーズに応えられている。

生徒の教育的ニーズに応えられていると強く考える教職員の割合が3倍になっている。総合育成支援員の複数配置や教科でのチームティーチングなどが効果を上げていると考えられる。



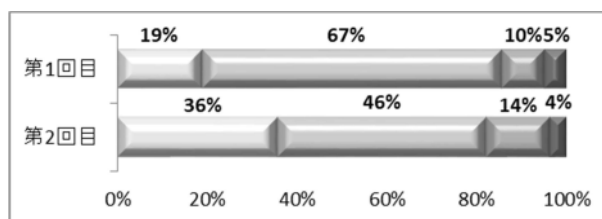
### 設問4. 授業をするうえで、生徒が抱える事情（学力不振、LD等）に伴って生じる負担感がある。

負担感を強く持つ教職員の割合は2分の1に減少しているが、75%の教職員が負担感を持っている。この負担感を減らすための何らかの手立てを検討する必要があると考える。



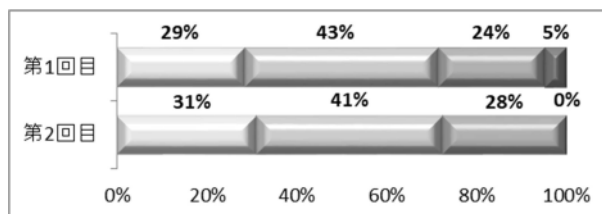
設問5. 支援教育においては、負担に感じる事があっても、達成感を持つ場合もある。

達成感を持つことができると強く感じる教職員は2倍に増加している。前問から負担に感じている教職員は多いことがわかったが、この設問からは達成感も感じている教職員は多くいることがわかる。



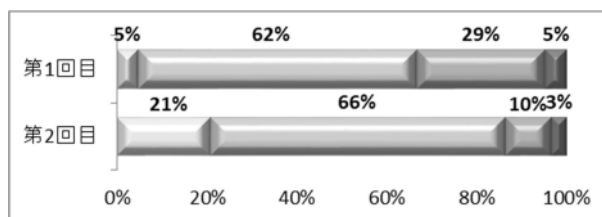
設問6. 生徒の情報は適切に共有されている。

概ね、生徒の情報は適切に共有されている。しかし、3割程度の教職員は適切に共有されていないと感じているため、今後も適切な情報共有の工夫が必要であると考ええる。



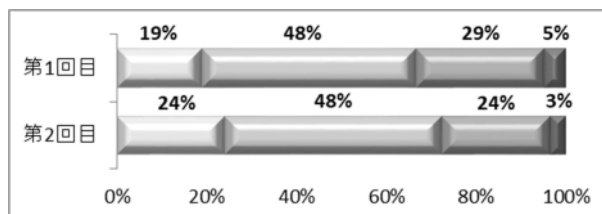
設問7. 情報を適切に活用し、必要な生徒のアセスメントができている。

強い肯定を感じる教職員が増えている。前問の結果からも、共有された情報が活用され、必要な生徒へのアセスメントが適切に行われていると考える。



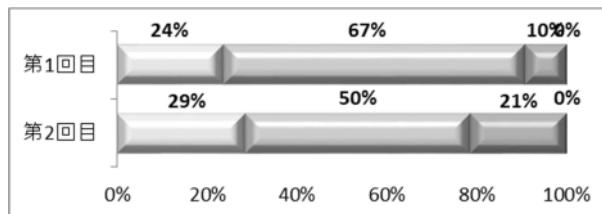
設問8. 支援を必要とする生徒への対応に関して学校全体の共通理解を図ることができている。

強い肯定を感じる教職員は若干増加しているが、3割程度の教職員は共通理解を図ることができていないと考えている。そのため、今後も適切な共通理解を図る工夫が必要であると考ええる。



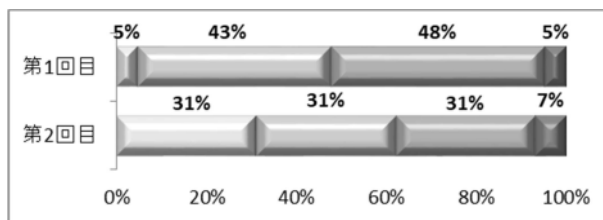
設問9. ケース会議は生徒の指導に効果的である。

ケース会議は生徒の指導に効果的であると考えられる教職員は多いが、今年度は必要なことが少なく、あまりケース会議は行われなかった結果が表れているのではないかと考える。



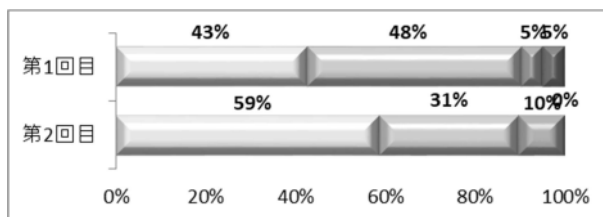
**設問 10. 生徒個々のニーズに応える学習指導方法の共有ができています。**

強い肯定を感じる教職員が増えている。これは、今回の研究のテーマを踏まえた取り組みの結果が表れていると考える。しかし、まだ4割程度の教職員が共有できていないと感じているため、今後も引き続き共有方法を検討していく必要がある。



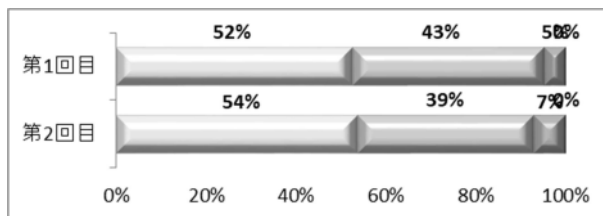
**設問 11. SC・SSWとの協働は、支援教育の充実に役立つ。**

強い肯定感を持つ教職員は増えている。多くの教職員が専門職との協働は支援教育の充実に役立つと捉えていることがうかがえる。



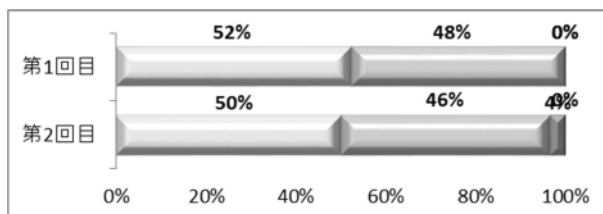
**設問 12. 教室の環境を整え、生徒が落ち着いて授業を受けられるようにしている。**

概ね、生徒が落ち着いて授業を受けられるよう、教室の環境が整っていることがうかがえる。携帯電話のマナー指導や視覚教具を取り入れた授業への転換などによる成果の表れではないかと考える。



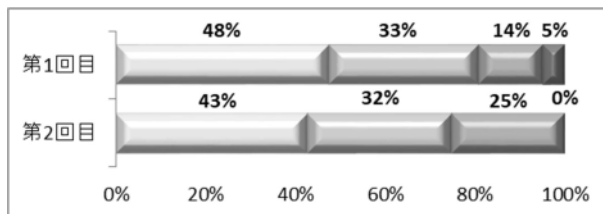
**設問 13. 授業の中で、工夫した教材（ワークシート等）を用いて学習しやすいようにしている。**

大きな変化はないが、ほとんどの授業で、生徒が学習しやすいように教材を工夫されていることがわかる。今後、この工夫を共有できるようなツールを作ることが必要であると考えます。（設問 10 参照）



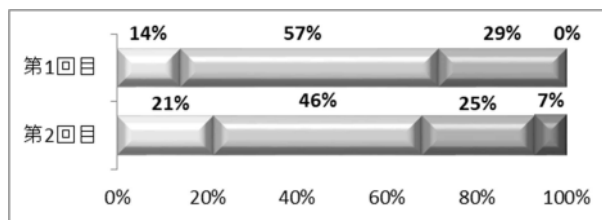
**設問 14. 授業において、視覚に訴える教具（プロジェクタやタブレット等）を使用した工夫をしている。**

概ね、視覚効果を利用した授業が行われている。これは iPad, プロジェクタや電子黒板などが整備され活用されている結果の表れと考える。



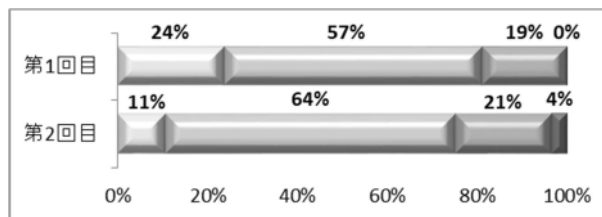
設問 15. 授業以外の学習指導（補習、自宅学習課題等）において、特別な教育的支援が必要な生徒も学習しやすいような工夫をしている。

強い肯定感を持つ教職員は若干増えているが、3割程度の教職員が授業以外の学習指導での工夫が難しいと感じている。



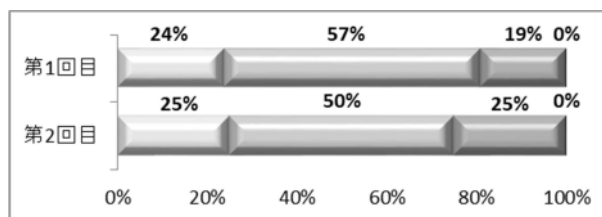
設問 16. 授業および授業以外の学習指導において、生徒個々のニーズに応える指導方法を取り入れている。

強い肯定感を持つ教職員が減少しており、また4分の1の教職員が生徒個々のニーズに応える指導方法を取り入れることが難しいと考えている。指導方法の共有が適切に行われていないことがここでもうかがえる（設問 10 参照）。



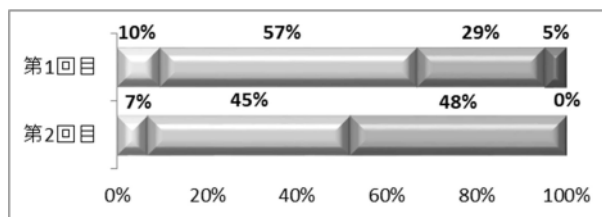
設問 17. 特別な教育的支援を必要とする生徒の理解を促すために、教材・教具等を工夫している。

4分の1の教職員が否定的な意見を持っている。しかし、多くの授業で教材・教具等の工夫はされていることから（設問 13・14 参照）、特別な教育的支援を必要とする生徒のための教材・教具等の工夫が難しいと思われるように感じる。



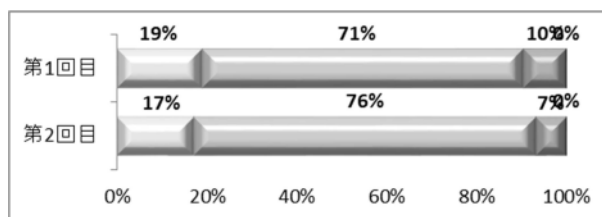
設問 18. 生徒に学習意欲があると感じる。

否定的な感想を持つ教職員が半数近くいる。早急に、この原因が何かを考察し、対策を考える必要がある。その上で、生徒への「学習への動機づけ」を考えていかなければならない。



設問 19. 生徒が学校生活に満足していると感じる。

概ねの教職員は、肯定的に感じている。前問を踏まえて見ると、生徒たちは学習面以外で学校生活を満足して送っていると感じている教職員は多いのではないかと考える。



## ■ 教職員全体を通しての考察

- \* 第1回目より第2回目のアンケートの回答数が40%増えていることから、支援教育を意識している教職員は増えていると考えられる。
- \* 本校で行っている支援教育が適切に理解・推進されていることが表れている。
- \* さまざまな授業において、教材・教具等の工夫がされている。しかし、共有することにおいては、まだまだ検討していく必要がある。特に、特別な教育的支援が必要な生徒に対しての教材・教具等においては、まだまだ課題がある。
- \* 学習意欲がない生徒に対し、その原因の追究や学習意欲の向上を図る方法を模索し検討することが、大きな継続課題である。

### 2) 生徒対象

対 象：定時制全生徒

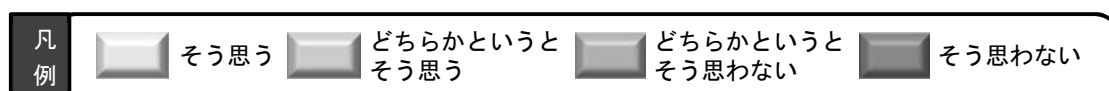
(1年生54名, 2年生39名, 3年生34名 計127名)

実施日：第1回 平成30年6月27日

第2回 平成31年1月16日

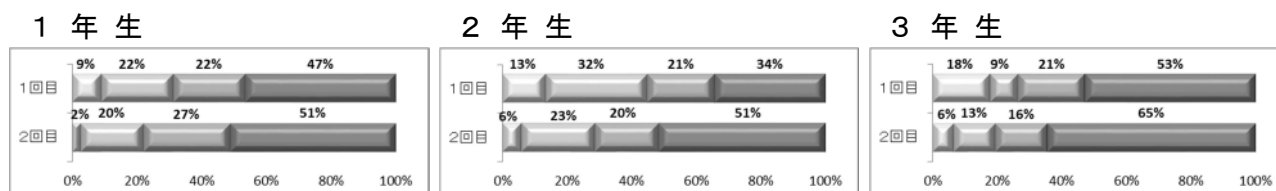
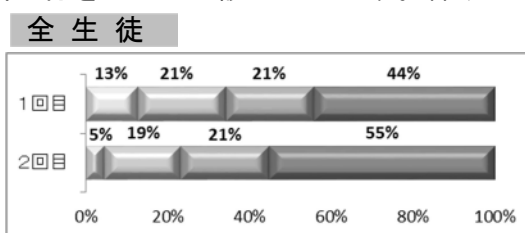
回収数：第1回117名(1年生45名, 2年生38名, 3年生34名)

第2回107名(1年生41名, 2年生35名, 3年生31名)



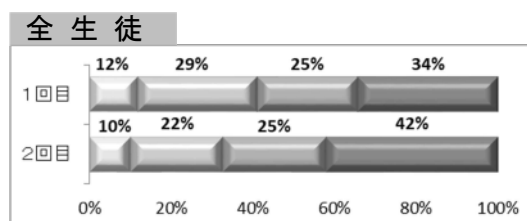
設問1. 文章を読むときに困ることが多い(例 語や行をとばして読んでしまう。繰り返し読んでしまう。など)。

読むことに対して困りを感じる生徒が減少していることから、さまざまな工夫や支援の結果であると考えられる。また7割以上の生徒が読むことに対して、困りを感じていない。

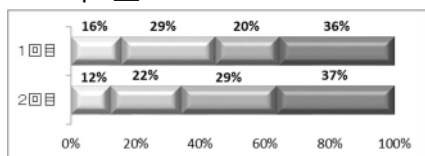


設問2. 話をするときに困ることが多い(例 思ったことをすぐ話してしまう。自分の気持ちを言葉にして伝えるのが苦手。など)。

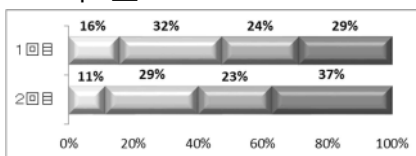
話すことに対して困りを感じる生徒が減少していることから、さまざまな経験を通してコミュニケーション力が少しずつ身につけてきていると考えられる。



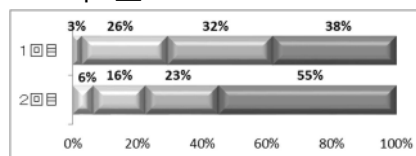
### 1 年生



### 2 年生



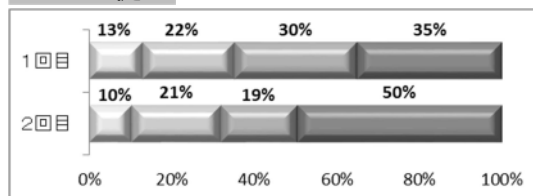
### 3 年生



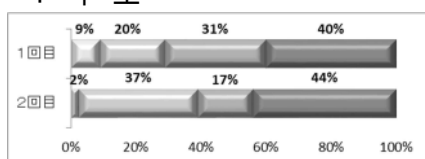
## 設問 3. 書くときに困ることが多い (例 書き間違いをよくする。字を書くのが遅い。など)。

全体では7割程度の生徒が書くことに対して困りを感じていない。しかし、1年生では困りを感じる生徒が増えている。この原因を追究し、適切な支援を行う必要がある。

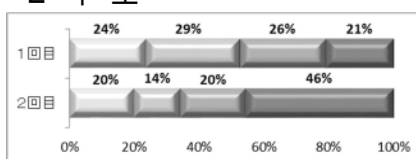
### 全 生 徒



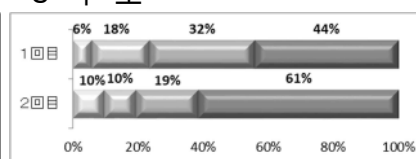
### 1 年生



### 2 年生



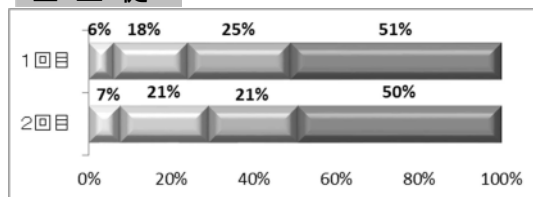
### 3 年生



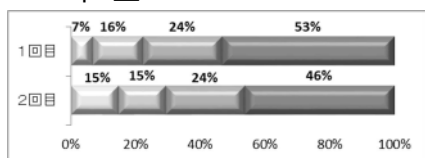
## 設問 4. 聞くことに困ることが多い (例 「知った」を「行った」と聞き間違える。など)。

全体では7割程度の生徒が聞くことに対して困りを感じていない。しかし、1年生と2年生では困りを感じている生徒が増えている。この原因を追究し、適切な支援を行う必要がある。

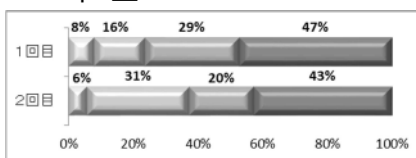
### 全 生 徒



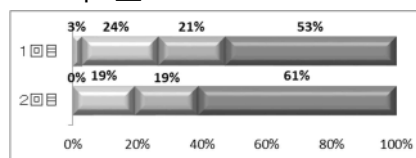
### 1 年生



### 2 年生



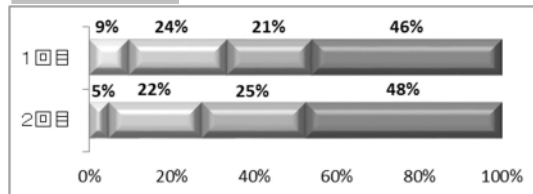
### 3 年生



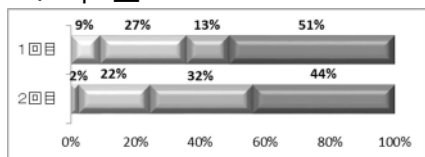
## 設問 5. 落ち着いて物事に取り組むのに困ることが多い (例 物を忘れてきたり無くしたりする。じっと座っているのが苦手。など)。

7割以上の生徒が落ち着いて物事に取り組むことができている。

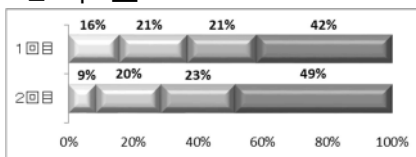
### 全 生 徒



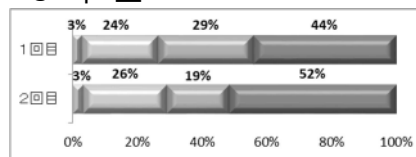
### 1 年生



### 2 年生

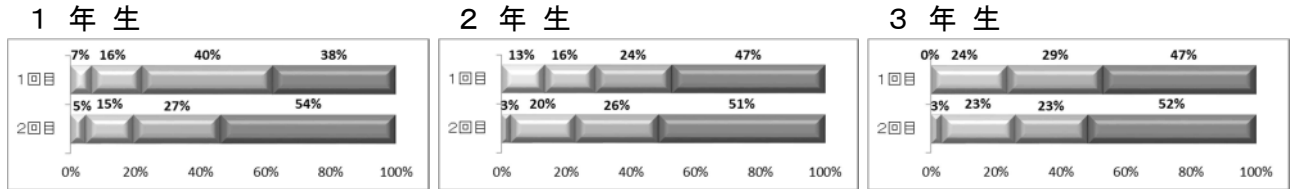
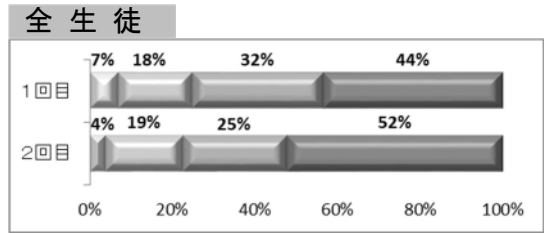


### 3 年生



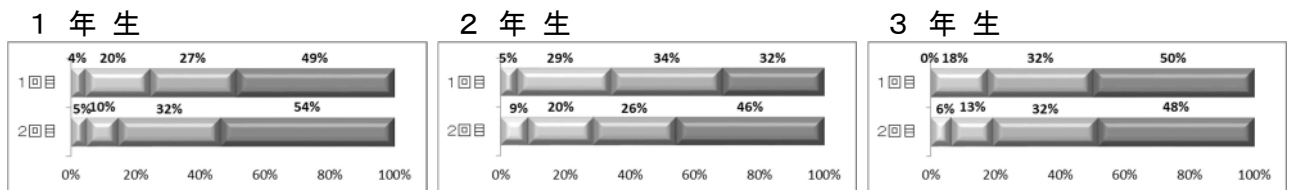
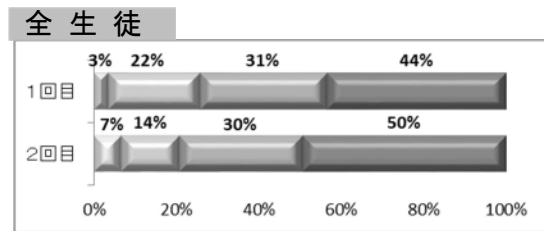
設問6. 気持ちをコントロールするのに困ることが多い(例 人ごみの中にいることが苦手。ついカッとなり感情的になる。など)。

7割以上の生徒が気持ちをコントロールすることができている。コミュニケーション力が少しずつ身についてきている(設問2参照)ことや、自己理解が深まったことによる結果と考える。



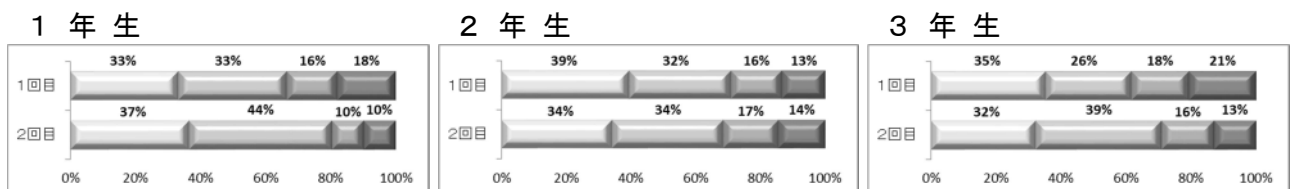
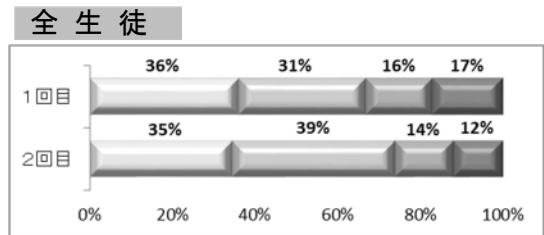
設問7. 複雑なことを理解するのに困ることが多い(例 一度に二つ以上のことを言われると分からなくなる。野球・サッカー、集団ゲームなどのルールを理解することが苦手。など)。

全体では8割程度の生徒が複雑なことを理解することに対して困りを感じていない。



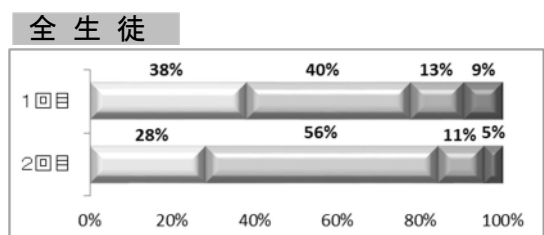
設問8. 落ち着いて受けることができる授業が多い。

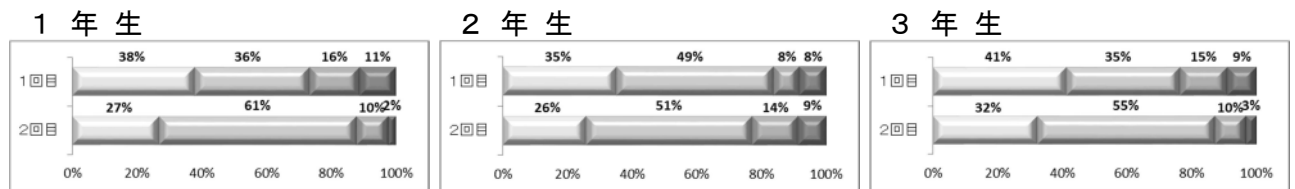
7割程度の生徒が落ち着いて授業を受けることができている。



設問9. わからないことがあると、ていねいに対応してもらえる授業が多い。

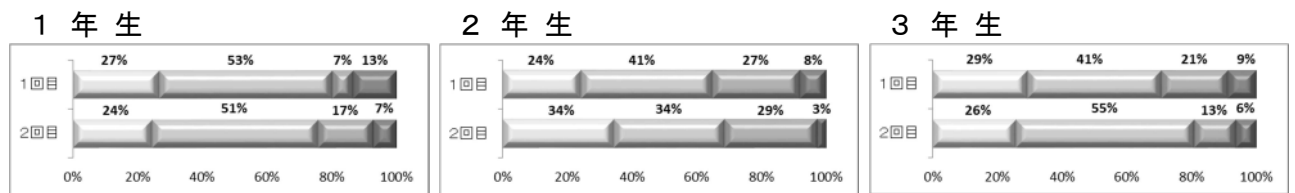
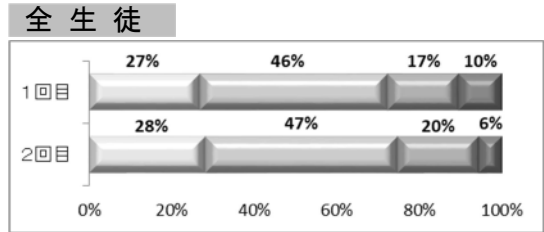
8割程度の生徒がていねいに対応してもらっていると感じている。少人数制講座やチームティーチング、総合育成支援員の複数配置などによる結果と考えられる。





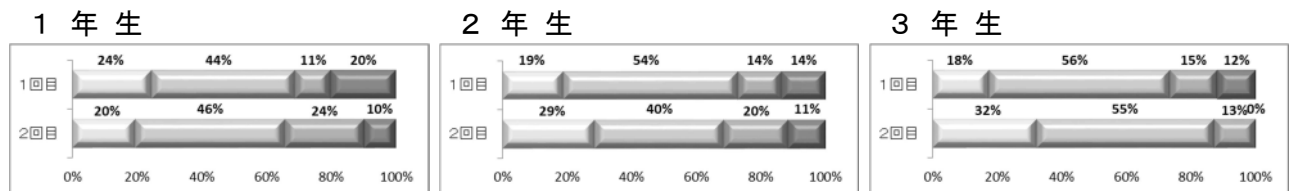
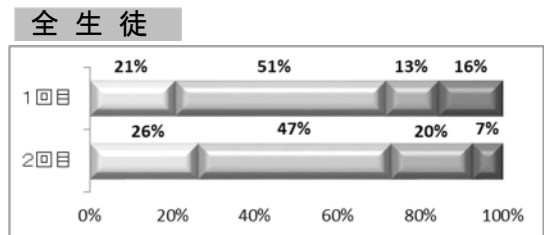
設問 10. 授業に興味を持てたり理解しやすくするための工夫（プロジェクタやタブレットの使用など）がされている授業が多い。

7割以上の生徒が工夫された授業が多いと感じている。iPad, プロジェクタや電子黒板などを使用した視覚優位な授業が多く行われている結果と考える。



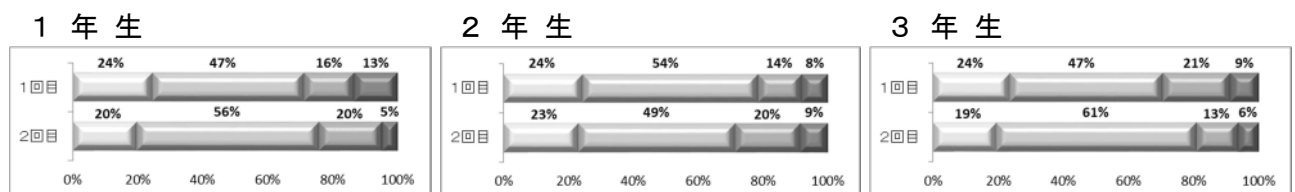
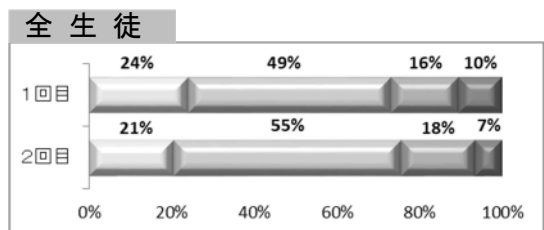
設問 11. プロジェクタやタブレットの使用が授業の理解に役立っている。

全体では7割以上の生徒は視覚優位の授業が理解に役立っていると考えている。特に3年生では顕著に表れている。



設問 12. 授業の内容を理解している。

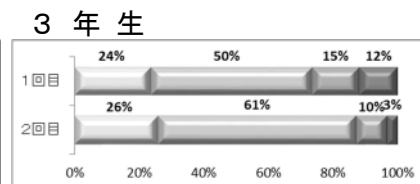
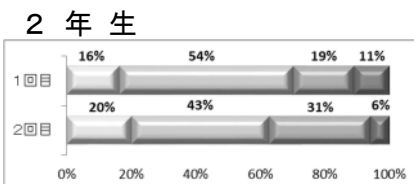
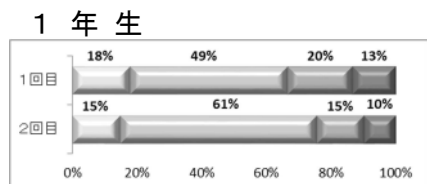
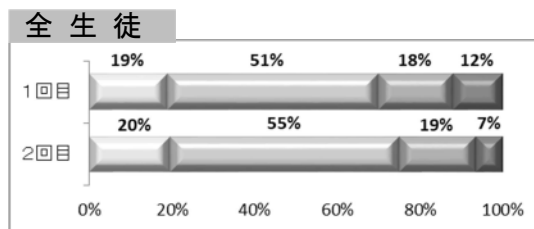
全体では7割以上の生徒が授業の内容を理解している。授業でのさまざまな工夫や支援の結果であると考え。





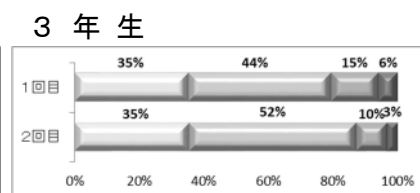
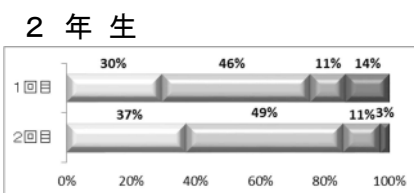
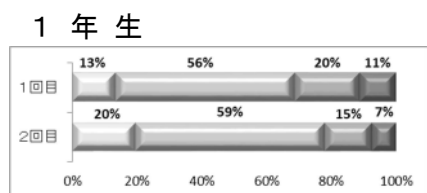
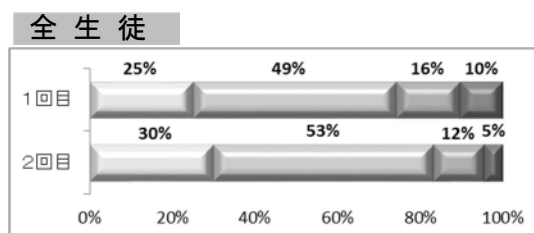
設問 13. 授業に満足している。

全体では7割以上の生徒が授業に満足している。



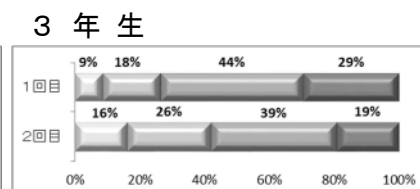
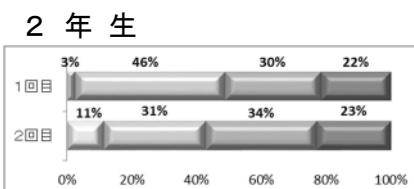
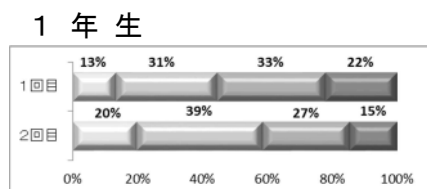
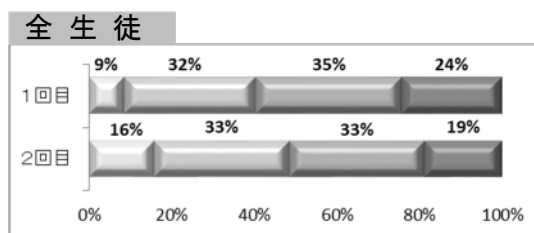
設問 14. 成績のつけ方がわかりやすい。

8割以上の生徒が成績のつけ方を理解し、納得している。



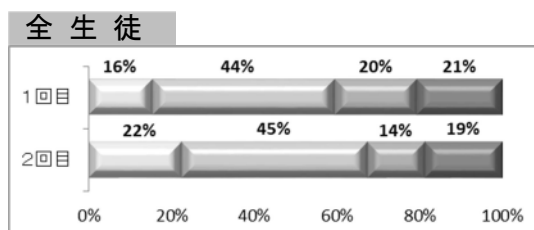
設問 15. 自分から積極的に勉強するようになった。

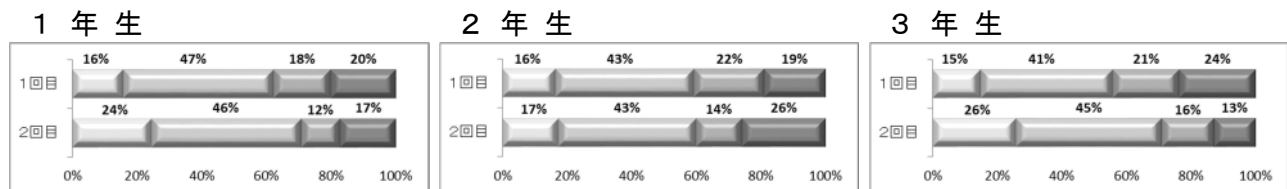
全体では肯定意見が増加している。しかし、半数以上の生徒は積極的に勉強に取り組むことができていない。そのような生徒に対し、原因を追究し、さらなる指導を行う必要がある。



設問 16. 先生やスクールカウンセラーに、相談しやすい雰囲気がある。

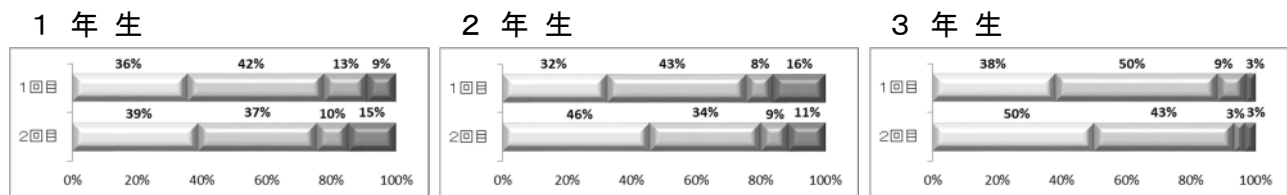
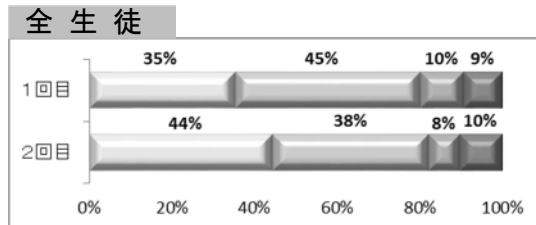
全体では7割程度の生徒が相談しやすい関係を築けている。





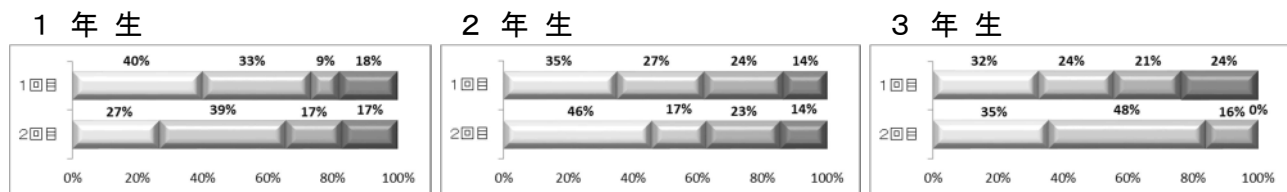
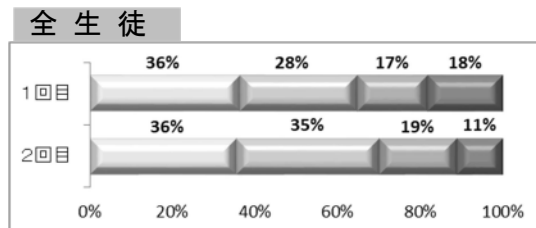
設問 17. 友人関係がうまくいっている。

全体として8割以上の生徒が良好な友人関係が築けている。



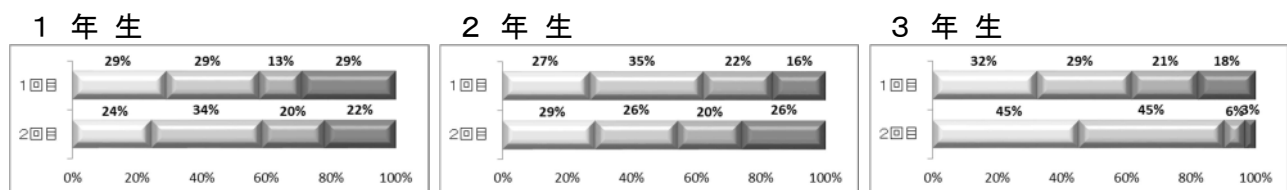
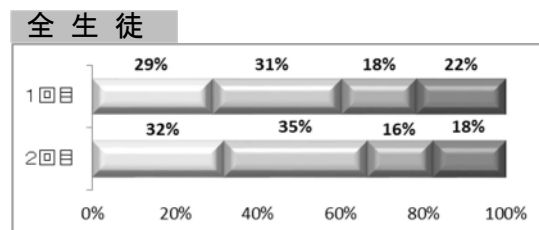
設問 18. 目標を持って学校生活を送っている。

肯定意見が3年生では増加しているのに対し、1年生では減少している。将来展望を開くような、さらなる日常の指導が必要であると考え。



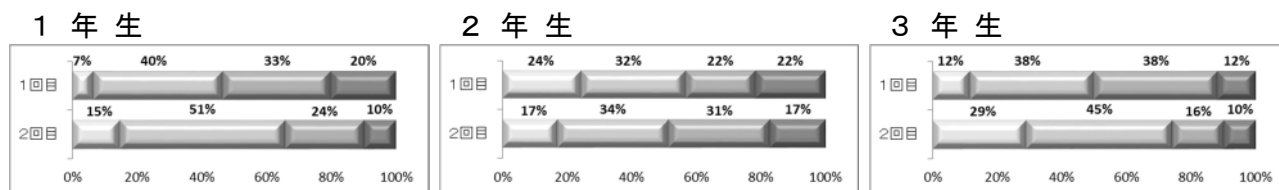
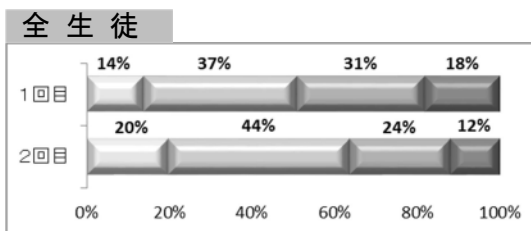
設問 19. 卒業後の進路について考えられる。

肯定意見が3年生では増加しているのに対し、2年生では減少、1年生では変化が見られない。卒業後の進路について考えさせるために、より丁寧な指導が必要であると考え。



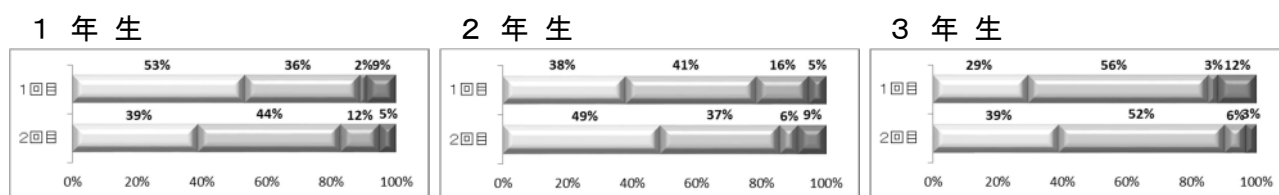
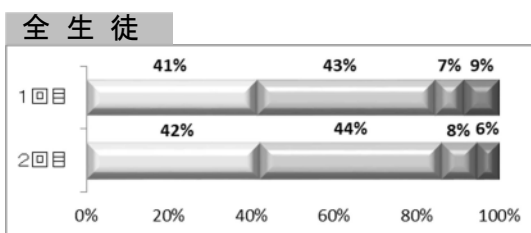
設問 20. 学校生活をとおして、問題を解決する能力がついた。

1年生や3年生では、肯定意見が増加している。精神的に成長した結果がうかがえる。しかし、全体では4割程度の生徒がまだ十分な能力が身についたと思っていない。



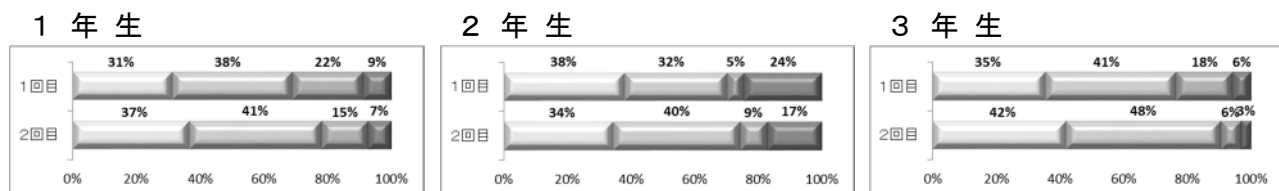
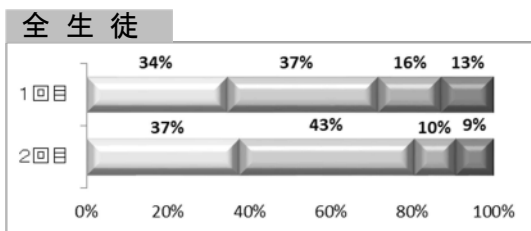
設問 21. ルールやマナーを守って学校生活を送っている。

8割以上の生徒がルールやマナーを守って学校生活を送ることができている。



設問 22. 自分のことを大切にできている。

全体として肯定意見が増加している。特に3年生は9割の生徒が自分自身を大切にできおり、自己肯定感の向上がうかがえる。



■ 生徒全体を通しての考察

\* グラフには直接反映されていないが、設問1～設問7に対して1つでも「強くそう思う」または「そう思う」という回答をしている生徒は何らかの「困り」を感じていると考えられる。そのような生徒が7割に達しているのが本校の現状である。そのような生徒に対し、今後も指導方法等を研究し支援を継続・改善していく必要がある。

- \* 1回目117名の回答で「困り」を感じている生徒が86名（73.5%）、感じていない生徒31名（26.5%）。  
2回目107名の回答で「困り」を感じている生徒が75名（70.1%）、感じていない生徒32名（29.9%）。  
一見、「困り」を感じている生徒の割合が減っているようにも見て取れるが、「困り」を感じている生徒がその「困り」を解消できないまま、退学もしくは休学に至っているのではないかと懸念される。実際「困り」を感じていない生徒の実数は大きく増えていない。
- \* 「書くこと」や「聞くこと」に対して困りを感じている生徒は増加している。こういった生徒の困りに対応できるよう、さらなる丁寧な指導が求められる。
- \* 半数以上の生徒が積極的に勉強できていないとの回答をしていることは今後の課題であると言える。
- \* 学校生活を通して、自己肯定感の向上がうかがえる。このことは、本校でのこれまでの支援の成果であると考えられる。

### 3) 保護者対象

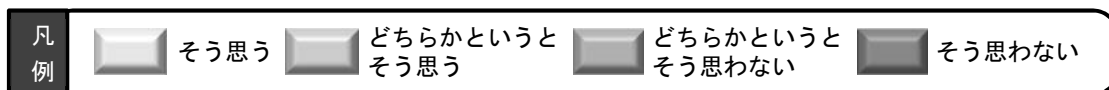
対象：定時制生徒保護者 127名

実施日：第1回 平成30年7月

第2回 平成30年12月

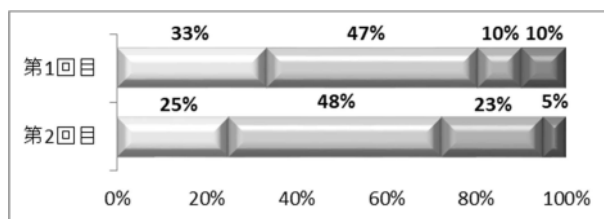
回収数：第1回51名

第2回40名



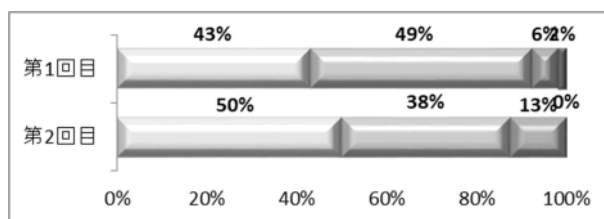
#### 設問1. 授業に意欲的に取り組んでいる。

肯定意見が減少している。生徒が学校生活に慣れてきたこともあり、授業以外のことに興味や関心が向いてきたと感じる保護者が増えたのではないかと考える。



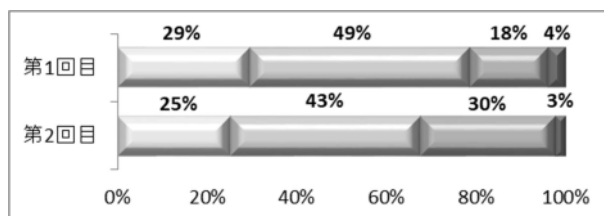
#### 設問2. 教員は、お子様を理解し指導をしている。

9割程度の保護者が、教員は生徒を理解し、指導をしていると捉えている。



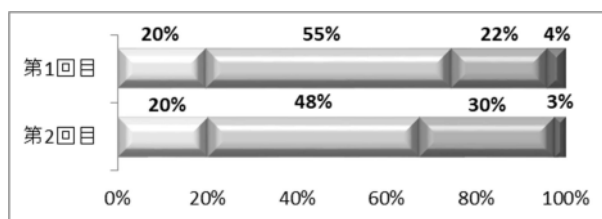
#### 設問3. 授業の内容を理解している。

授業が進むにつれ、内容は難解になってきている。保護者は生徒から聞く授業の様子や成績情報から判断していると思われるため、肯定意見が減少していると考えられる。



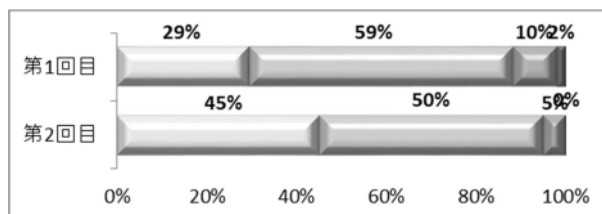
#### 設問4. 授業に満足している。

3割程度の保護者が、生徒が授業に満足していないと感じている。このことから、さらなる丁寧な指導が求められていると考える。



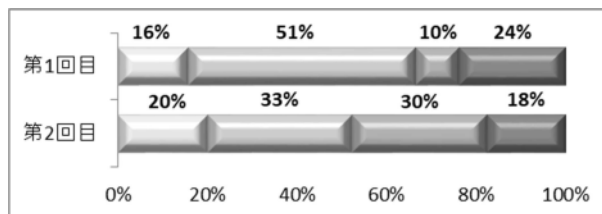
#### 設問5. 教員は、お子様に成績のつけ方をわかりやすく説明できている。

多くの保護者が成績のつけ方を理解し、納得している。担任が三者面談等で保護者にもわかりやすく説明できている結果ではないかと考える。このことから、学期ごとに行っている学年連絡会議で情報を共有することは有効である。



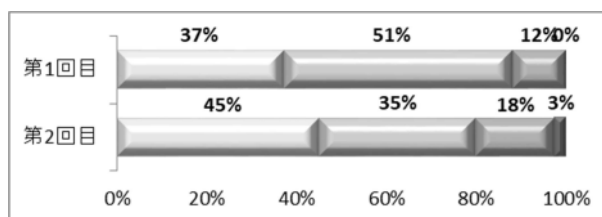
#### 設問6. 積極的に勉強することができている。

半数以上の保護者は生徒が積極的に勉強していると捉えている。しかし、学校生活の慣れから、取り組む意欲をなくしていると感じる保護者が増えている。さらなる家庭学習等の指導が必要であると考え。



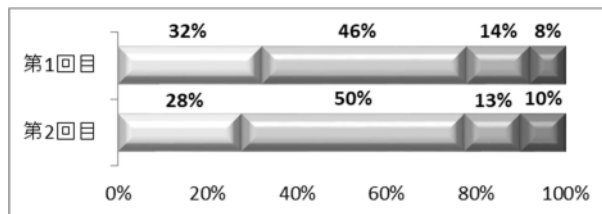
#### 設問7. 教員やスクールカウンセラーに、相談しやすい雰囲気がある。

8割以上の保護者が教員やスクールカウンセラーに相談しやすいと感じている。ひとりひとりに寄り添って、親身に相談に乗ることができていることがうかがえる。



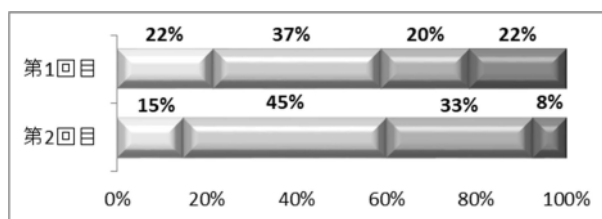
#### 設問8. 友人関係がうまくいっている。

8割程度の保護者は生徒同士の友人関係がうまくいっていると感じている。保護者は生徒から聞く様子で判断していると思われるため、生徒は少ない人数での学校生活の中で、上手く人との距離感を保っているのではないかと考える。



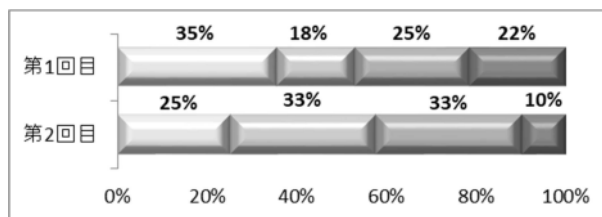
設問 9. 日々、目標を持って学校生活を送っている。

6割程度の保護者は、生徒が目標を持って学校生活を送っていると感じている。強い否定意見は減少しているが、あまり大きな変化は見られないことから、生徒の将来展望を開くような、さらなる日常の指導と進路指導が必要であると考えます。



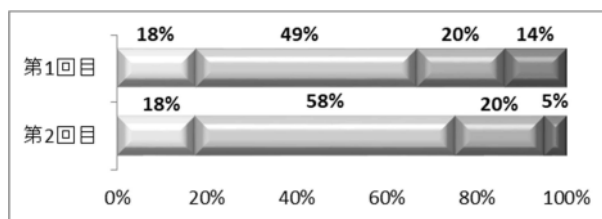
設問 10. 卒業後の進路について考えることができている。

前問と同じことがうかがえる。また、生徒だけでなく保護者に対して、卒業後の進路についての情報提供をさらにわかりやすく伝える必要があるのではないかと考える。



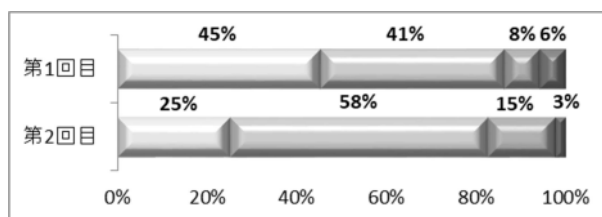
設問 11. 学校生活を通して、問題を解決する能力がついている。

8割程度の保護者が、生徒が学校生活を通して問題を解決する能力が身についたと感じている。多岐にわたる身の回りの様々な問題に対して、生徒が対応していくのを、家庭でも見受けられたのではないかと考える。



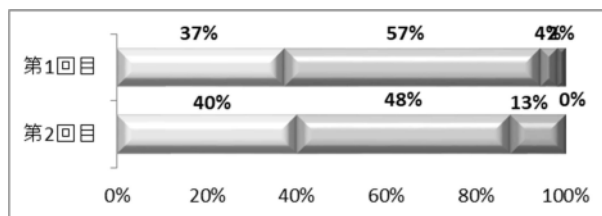
設問 12. ルールやマナーを守って学校生活を送っている。

8割以上の保護者が、生徒はルールやマナーを守って学校生活を送っていると感じている。



設問 13. 子どもに合った支援を受けられていると感じる。

9割程度の保護者が、それぞれの生徒に合った支援を受けられていると感じている。教員が生徒に対して行っている支援が、保護者にも適切に伝わっていることがうかがえる。



■ 保護者全体を通しての考察

\* 保護者対象のアンケートの回収率は、第1回目は45%程度、第2回目は40%程度であった。次回のアンケートまでに、この回収率を上げる方法を検討する必要がある。

- \* 授業の内容が難しくなるにつれ、生徒の理解度や満足度が下がると捉える保護者は多い。難しい内容に対してさらなる丁寧な指導が必要である。
- \* 半数近くの保護者が、生徒が積極的に勉強に取り組めていないと感じている。そのように感じるのは、家庭学習での取り組み方で判断することが多いと考える。このことから、家庭学習への指導方法に工夫が必要である。
- \* 生徒の卒業後の進路について、学校での取り組み等が保護者に伝わっていないように感じる。保護者にも情報を提供できるようにする。
- \* 多くの項目において、概ね肯定意見は多い。

### 3. 調査研究の到達点

調査研究の到達目標として、設定した2点について本年度の到達点は以下のとおりである。

#### 目標1 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の具体的策定

個々の生徒が学習に臨む態勢を整えることができるように、そのニーズに応じて教員が適切に支援できる校内システムの構築に取り組み、教職員とSCやSSWとが一体となって、それぞれの専門性を活かした効果的かつ効率的な連携のあり方を策定する。

に対しては、

生徒が学習に臨む態勢を整える外的支援体制として、「支援コーディネーター」についての教職員間での認識が深まり、その役割を果たせるような状況が整ってきた。また、SCとSSW相互の情報交流や意見交換等協働の体制も充実してきた。さらに、アセスメント機能強化という観点においては、ケース会議が柔軟な形態で開催でき、SCやSSWという専門職を含めて対応するケースが増加してきた。また、そのために必要な情報の収集と管理、活用も体制が整ってきた。

一方、生徒が学習態勢を整えるための個々の生徒の内的支援として、SSTの取組にも一定の成果が表れてきた。新たに取り組み始めた1年生においては、苦手なグループワークにも参加できる生徒の増加や、自己理解が進んだ生徒や自己表現ができるようになった生徒が増加してきたのは大きな成果である。2年生の取組においても発表の課題における発言など効果を表しつつある。

#### 目標2 学習指導方法と評価方法の確立

生徒個々のニーズに応える学習指導法の開発にあたり、「発達障がいがある生徒を対象とした特性を踏まえた学習指導法」「小学校・中学校で長期欠席（不登校）があった生徒を対象とした未学習内容を補充しながらの学習指導法」について事例を蓄積し分析する。

学習目標の達成度合いを評価する評価法については、個々に応じた学習指導法に適応しながら他の生徒の評価との整合性を持たせた評価法を策定する。

に対しては、

個々の生徒の「困り」によって対応は様々で指導法も個別的であり、一般化にまでは至らなかった。しかし、ある生徒に効果がある取組は他の生徒にとっても有効であると考えられ、今年度の取組も、今後、多くの生徒の学力保障に役立つものとして活用できる事例になるものとする。

また、上記の目標に付随して設定した到達目標2点についての本年度の到達点は以下のとおりである。

### 目標3 支援を支える教職員の知識・理解の深化

前年度までの2年間の調査研究を通して、研修等による教職員の知識や理解は深まり、意識の変革も進んできた。本研究においてはさらなる向上を目指して、引き続き校内での研修会の実施や、先進的な取組をしている他校の視察を計画する。

に対しては、

研修会自体は多くなかったが、日々の実践等の経験を加味すると教職員の知識や理解は深まっており、生徒についての意見交流会等も生徒支援への認識の変革に寄与したと考える。

他校の視察からは、本校とよく似た取組内容や、自学自習課題の活用、外国人生徒への指導を小中学校の未学習部分の学び直し指導に繋げる取組、成績を評定のみから観点別評価へ変更する取組、また進路指導面における外部機関との連携など参考となる事例を多く得られた。

### 目標4 校内体制を確立するための人材育成

「困り」のある生徒が学習態勢を整えるための支援および実際の学習指導が校内で円滑に行われるよう、主導的立場で取りまとめる人材の養成を図る。特に、学習態勢の構築に関しては、「ケース会議」を円滑に進行させるために教職員とSCおよびSSWとの信頼関係を構築し、SCやSSWを校内で有効に機能させる人材を「支援コーディネーター」として養成を図る。

SCやSSWについても、教職員と共に「困り」の解消に取り組めるように学校組織や生徒指導についての知識を共有できるよう図る。

に対しては、

「支援コーディネーター」については、その役割が教職員間に一定認められ、有効な活動に繋がってきている。

SCとSSWについても、同様で、教職員間の連携の向上が進んだ。

これらのことは上記の様に生徒の学習態勢を整える意味で重要な役割を担えていると考える。



## IV 次年度の課題

個別の事例を重ねた経験をもとにした「システム化」や「マニュアル化」について実現を見ることができなかった。特定の力量を持った教職員の存在が様々な「困り」を抱えた生徒一人ひとりに対する支援を可能としたり、確かな学力を保障する学習指導ができたりするのではなく、教職員集団が変化してもこれらが可能となるような校内体制の実現を目指したい。

### (1) 学習態勢確立のための支援方法および支援体制の具体的策定

- \* 上記の様に「システム化」や「マニュアル化」については、活動内容等を文字化して次期担当者に伝達できるような形には依然として至っておらず、実現を目指したい。
- \* 週に一度のみ来校するSSWについては、来校日を増やして少なくともSCと同等にすることは将来へ向けた課題である。
- \* 教職員のちょっとした気づきは普通の会話の中で出ても、その場で消えてしまうことが多い。さらに「支援コーディネーター」が、集約しきれていない生徒の情報も多いと考えられる。このような教職員の気づきといった情報を記録していき、「プロフィールシート」の更新に効果的な簡便な記録の方策を検討する必要がある。また、その情報について「知りたいと思ったことがすぐ分かる」ような利用方法の改善も必要である。
- \* 生徒の学習態勢を整えるために実行したプランの評価（すなわちプランニングが適切に行えていたか否か）を十分に行うことができていない。その適否を評価して次のアセスメントとプランニングに繋げるサイクルの構築が必要である。
- \* SSTに関しては、実施初年度の1年生や2年目の2年生の取組であり、授業内容への抵抗感のある生徒への対処、内容の掘り下げなどの改善や充実の方策を検討する余地があり、今後の課題である。

### (2) 学習指導方法と評価方法の確立

- \* 各生徒の変化の様子を具現化する方策を検討すべきであり、完成した具体的なチェック項目による試行と検証が必要である。
- \* 今年度は「発達障がいの診断を受けている生徒」を対象に研究を行ったが、実情としては「診断を受けていないが疑わしい生徒」が少なくない。このような生徒への対応についても普遍化が可能であれば調査研究の対象とする。
- \* 評価方法については、検討を行うまで至らなかった。次年度以降の課題である。

## 学習状況のチェック表

年	組	番	氏名
---	---	---	----

下記の ①～⑪ それぞれについて、該当する数字に○をつけてください。

1 : できていない    2 : どちらともいえない    3 : できている

① 板書された内容をノートやプリントに書きとることができる。

1                      2                      3

② 教員の話や指示を聞き、行動することができる。

1                      2                      3

③ 提出物をきちんと出すことができる。

1                      2                      3

④ 同じ質問を繰り返したり、何度も聞き返したりせず、聞くことができる。

1                      2                      3

⑤ 一つのことにこだわっても（興味を持って）、時間の切り替えがうまくできる。

1                      2                      3

⑥ 授業等の直前に時間割や学習場所が変更になっても対応できる。

1                      2                      3

⑦ 具体的に指示されたことだけでなく、自分で計画を立てることもできる。

1                      2                      3

⑧ 整理整頓ができて、物の管理ができる。

1                      2                      3

⑨ 準備や片付けに時間をかけず、要領よくできる。

1                      2                      3

⑩ 質問の意図に応じた発表（発言）ができる。

1                      2                      3

⑪ 自分から質問をしたときに、相手の回答を待ってから次の話題に替えられる。

1                      2                      3

月	日	教科	教科担当者
---	---	----	-------

## 資料 2

## 意識調査アンケート結果（教職員対象）

4：そう思う

3：どちらかというと思う

2：どちらかというと思わない

1：そう思わない

設問 1.	4	3	2	1	計
第 1 回	7(33%)	13(62%)	1( 5%)	0( 0%)	21(100%)
第 2 回	12(41%)	14(48%)	2( 7%)	1( 3%)	29(100%)

設問 2.	4	3	2	1	計
第 1 回	10(48%)	10(48%)	1( 5%)	0( 0%)	21(100%)
第 2 回	19(66%)	9(31%)	1( 3%)	0( 0%)	29(100%)

設問 3.	4	3	2	1	計
第 1 回	2(10%)	16(76%)	2(10%)	1( 5%)	21(100%)
第 2 回	9(31%)	17(59%)	3(10%)	0( 0%)	29(100%)

設問 4.	4	3	2	1	計
第 1 回	8(38%)	8(38%)	3(14%)	2(10%)	21(100%)
第 2 回	5(18%)	16(57%)	7(25%)	0( 0%)	28(100%)

設問 5.	4	3	2	1	計
第 1 回	4(19%)	14(67%)	2(10%)	1( 5%)	21(100%)
第 2 回	10(36%)	13(46%)	4(14%)	1( 4%)	28(100%)

設問 6.	4	3	2	1	計
第 1 回	6(29%)	9(43%)	5(24%)	1( 5%)	21(100%)
第 2 回	9(31%)	12(41%)	8(28%)	0( 0%)	29(100%)

設問 7.	4	3	2	1	計
第 1 回	1( 5%)	13(62%)	6(29%)	1( 5%)	21(100%)
第 2 回	6(21%)	19(66%)	3(10%)	1( 3%)	29(100%)

設問 8.	4	3	2	1	計
第 1 回	4(19%)	10(48%)	6(29%)	1( 5%)	21(100%)
第 2 回	7(24%)	14(48%)	7(24%)	1( 3%)	29(100%)

設問 9.	4	3	2	1	計
第 1 回	5(24%)	14(67%)	2(10%)	0( 0%)	21(100%)
第 2 回	8(29%)	14(50%)	6(21%)	0( 0%)	28(100%)

設問10.	4	3	2	1	計
第1回	1(5%)	9(43%)	10(48%)	1(5%)	21(100%)
第2回	9(31%)	9(31%)	9(31%)	2(7%)	29(100%)

設問11.	4	3	2	1	計
第1回	9(43%)	10(48%)	1(5%)	1(5%)	21(100%)
第2回	17(59%)	9(31%)	3(10%)	0(0%)	29(100%)

設問12.	4	3	2	1	計
第1回	11(52%)	9(43%)	1(5%)	0(0%)	21(100%)
第2回	15(54%)	11(39%)	2(7%)	0(0%)	28(100%)

設問13.	4	3	2	1	計
第1回	11(52%)	10(48%)	0(0%)	0(0%)	21(100%)
第2回	14(50%)	13(46%)	1(4%)	0(0%)	28(100%)

設問14.	4	3	2	1	計
第1回	10(48%)	7(33%)	3(14%)	1(5%)	21(100%)
第2回	12(43%)	9(32%)	7(25%)	0(0%)	28(100%)

設問15.	4	3	2	1	計
第1回	3(14%)	12(57%)	6(29%)	0(0%)	21(100%)
第2回	6(21%)	13(46%)	7(25%)	2(7%)	28(100%)

設問16.	4	3	2	1	計
第1回	5(24%)	12(57%)	4(19%)	0(0%)	21(100%)
第2回	3(11%)	18(64%)	6(21%)	1(4%)	28(100%)

設問17.	4	3	2	1	計
第1回	5(24%)	12(57%)	4(19%)	0(0%)	21(100%)
第2回	7(25%)	14(50%)	7(25%)	0(0%)	28(100%)

設問18.	4	3	2	1	計
第1回	2(10%)	12(57%)	6(29%)	1(5%)	21(100%)
第2回	2(7%)	13(45%)	14(48%)	0(0%)	29(100%)

設問19.	4	3	2	1	計
第1回	4(19%)	15(71%)	2(10%)	0(0%)	21(100%)
第2回	5(17%)	22(76%)	2(7%)	0(0%)	29(100%)

## 資料 2

意識調査アンケート結果（生徒対象）

4：そう思う

3：どちらかというと思う

2：どちらかというと思わない

1：そう思わない

設問 1.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	15(13%)	25(21%)	25(21%)	52(44%)	117(100%)
	第 2 回	5( 5%)	20(19%)	23(21%)	59(55%)	107(100%)
1 年	第 1 回	4( 9%)	10(22%)	10(22%)	21(47%)	45(100%)
	第 2 回	1( 2%)	8(20%)	11(27%)	21(51%)	41(100%)
2 年	第 1 回	5(13%)	12(32%)	8(21%)	13(34%)	38(100%)
	第 2 回	2( 6%)	8(23%)	7(20%)	18(51%)	35(100%)
3 年	第 1 回	6(18%)	3( 9%)	7(21%)	18(53%)	34(100%)
	第 2 回	2( 6%)	4(13%)	5(16%)	20(65%)	31(100%)

設問 2.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	14(12%)	34(29%)	29(25%)	40(34%)	117(100%)
	第 2 回	11(10%)	24(22%)	27(25%)	45(42%)	107(100%)
1 年	第 1 回	7(16%)	13(29%)	9(20%)	16(36%)	45(100%)
	第 2 回	5(12%)	9(22%)	12(29%)	15(37%)	41(100%)
2 年	第 1 回	6(16%)	12(32%)	9(24%)	11(29%)	38(100%)
	第 2 回	4(11%)	10(29%)	8(23%)	13(37%)	35(100%)
3 年	第 1 回	1( 3%)	9(26%)	11(32%)	13(38%)	34(100%)
	第 2 回	2( 6%)	5(16%)	7(23%)	17(55%)	31(100%)

設問 3.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	15(13%)	26(22%)	35(30%)	41(35%)	117(100%)
	第 2 回	11(10%)	23(21%)	20(19%)	53(50%)	107(100%)
1 年	第 1 回	4( 9%)	9(20%)	14(31%)	18(40%)	45(100%)
	第 2 回	1( 2%)	15(37%)	7(17%)	18(44%)	41(100%)
2 年	第 1 回	9(24%)	11(29%)	10(26%)	8(21%)	38(100%)
	第 2 回	7(20%)	5(14%)	7(20%)	16(46%)	35(100%)
3 年	第 1 回	2( 6%)	6(18%)	11(32%)	15(44%)	34(100%)
	第 2 回	3(10%)	3(10%)	6(19%)	19(61%)	31(100%)

設問 4.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	7( 6%)	21(18%)	29(25%)	60(51%)	117(100%)
	第 2 回	8( 7%)	23(21%)	23(21%)	53(50%)	107(100%)
1 年	第 1 回	3( 7%)	7(16%)	11(24%)	24(53%)	45(100%)
	第 2 回	6(15%)	6(15%)	10(24%)	19(46%)	41(100%)
2 年	第 1 回	3( 8%)	6(16%)	11(29%)	18(47%)	38(100%)
	第 2 回	2( 6%)	11(31%)	7(20%)	15(43%)	35(100%)
3 年	第 1 回	1( 3%)	8(24%)	7(21%)	18(53%)	34(100%)
	第 2 回	0( 0%)	6(19%)	6(19%)	19(61%)	31(100%)

設問 5.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	11( 9%)	28(24%)	24(21%)	54(46%)	117(100%)
	第 2 回	5( 5%)	24(22%)	27(25%)	51(48%)	107(100%)
1 年	第 1 回	4( 9%)	12(27%)	6(13%)	23(51%)	45(100%)
	第 2 回	1( 2%)	9(22%)	13(32%)	18(44%)	41(100%)
2 年	第 1 回	6(16%)	8(21%)	8(21%)	16(42%)	38(100%)
	第 2 回	3( 9%)	7(20%)	8(23%)	17(49%)	35(100%)
3 年	第 1 回	1( 3%)	8(24%)	10(29%)	15(44%)	34(100%)
	第 2 回	1( 3%)	8(26%)	6(19%)	16(52%)	31(100%)

設問 6.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	8( 7%)	21(18%)	37(32%)	51(44%)	117(100%)
	第 2 回	4( 4%)	20(19%)	27(25%)	56(52%)	107(100%)
1 年	第 1 回	3( 7%)	7(16%)	18(40%)	17(38%)	45(100%)
	第 2 回	2( 5%)	6(15%)	11(27%)	22(54%)	41(100%)
2 年	第 1 回	5(13%)	6(16%)	9(24%)	18(47%)	38(100%)
	第 2 回	1( 3%)	7(20%)	9(26%)	18(51%)	35(100%)
3 年	第 1 回	0( 0%)	8(24%)	10(29%)	16(47%)	34(100%)
	第 2 回	1( 3%)	7(23%)	7(23%)	16(52%)	31(100%)

設問 7.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	4( 3%)	26(22%)	36(31%)	51(44%)	117(100%)
	第 2 回	7( 7%)	15(14%)	32(30%)	53(50%)	107(100%)
1 年	第 1 回	2( 4%)	9(20%)	12(27%)	22(49%)	45(100%)
	第 2 回	2( 5%)	4(10%)	13(32%)	22(54%)	41(100%)
2 年	第 1 回	2( 5%)	11(29%)	13(34%)	12(32%)	38(100%)
	第 2 回	3( 9%)	7(20%)	9(26%)	16(46%)	35(100%)
3 年	第 1 回	0( 0%)	6(18%)	11(32%)	17(50%)	34(100%)
	第 2 回	2( 6%)	4(13%)	10(32%)	15(48%)	31(100%)

設問 8.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	42(36%)	36(31%)	19(16%)	20(17%)	117(100%)
	第 2 回	37(35%)	42(39%)	15(14%)	13(12%)	107(100%)
1 年	第 1 回	15(33%)	15(33%)	7(16%)	8(18%)	45(100%)
	第 2 回	15(37%)	18(44%)	4(10%)	4(10%)	41(100%)
2 年	第 1 回	15(39%)	12(32%)	6(16%)	5(13%)	38(100%)
	第 2 回	12(34%)	12(34%)	6(17%)	5(14%)	35(100%)
3 年	第 1 回	12(35%)	9(26%)	6(18%)	7(21%)	34(100%)
	第 2 回	10(32%)	12(39%)	5(16%)	4(13%)	31(100%)

## 資料 2

設問 9.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	44(38%)	46(40%)	15(13%)	11( 9%)	116(100%)
	第 2 回	30(28%)	60(56%)	12(11%)	5( 5%)	107(100%)
1 年	第 1 回	17(38%)	16(36%)	7(16%)	5(11%)	45(100%)
	第 2 回	11(27%)	25(61%)	4(10%)	1( 2%)	41(100%)
2 年	第 1 回	13(35%)	18(49%)	3( 8%)	3( 8%)	37(100%)
	第 2 回	9(26%)	18(51%)	5(14%)	3( 9%)	35(100%)
3 年	第 1 回	14(41%)	12(35%)	5(15%)	3( 9%)	34(100%)
	第 2 回	10(32%)	17(55%)	3(10%)	1( 3%)	31(100%)

設問10.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	31(27%)	53(46%)	20(17%)	12(10%)	116(100%)
	第 2 回	30(28%)	50(47%)	21(20%)	6( 6%)	107(100%)
1 年	第 1 回	12(27%)	24(53%)	3( 7%)	6(13%)	45(100%)
	第 2 回	10(24%)	21(51%)	7(17%)	3( 7%)	41(100%)
2 年	第 1 回	9(24%)	15(41%)	10(27%)	3( 8%)	37(100%)
	第 2 回	12(34%)	12(34%)	10(29%)	1( 3%)	35(100%)
3 年	第 1 回	10(29%)	14(41%)	7(21%)	3( 9%)	34(100%)
	第 2 回	8(26%)	17(55%)	4(13%)	2( 6%)	31(100%)

設問11.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	24(21%)	59(51%)	15(13%)	18(16%)	116(100%)
	第 2 回	28(26%)	50(47%)	21(20%)	8( 7%)	107(100%)
1 年	第 1 回	11(24%)	20(44%)	5(11%)	9(20%)	45(100%)
	第 2 回	8(20%)	19(46%)	10(24%)	4(10%)	41(100%)
2 年	第 1 回	7(19%)	20(54%)	5(14%)	5(14%)	37(100%)
	第 2 回	10(29%)	14(40%)	7(20%)	4(11%)	35(100%)
3 年	第 1 回	6(18%)	19(56%)	5(15%)	4(12%)	34(100%)
	第 2 回	10(32%)	17(55%)	4(13%)	0( 0%)	31(100%)

設問12.		4	3	2	1	計
全体	第 1 回	28(24%)	57(49%)	19(16%)	12(10%)	116(100%)
	第 2 回	22(21%)	59(55%)	19(18%)	7( 7%)	107(100%)
1 年	第 1 回	11(24%)	21(47%)	7(16%)	6(13%)	45(100%)
	第 2 回	8(20%)	23(56%)	8(20%)	2( 5%)	41(100%)
2 年	第 1 回	9(24%)	20(54%)	5(14%)	3( 8%)	37(100%)
	第 2 回	8(23%)	17(49%)	7(20%)	3( 9%)	35(100%)
3 年	第 1 回	8(24%)	16(47%)	7(21%)	3( 9%)	34(100%)
	第 2 回	6(19%)	19(61%)	4(13%)	2( 6%)	31(100%)

設問13.		4	3	2	1	計
全体	第1回	22(19%)	59(51%)	21(18%)	14(12%)	116(100%)
	第2回	21(20%)	59(55%)	20(19%)	7( 7%)	107(100%)
1年	第1回	8(18%)	22(49%)	9(20%)	6(13%)	45(100%)
	第2回	6(15%)	25(61%)	6(15%)	4(10%)	41(100%)
2年	第1回	6(16%)	20(54%)	7(19%)	4(11%)	37(100%)
	第2回	7(20%)	15(43%)	11(31%)	2( 6%)	35(100%)
3年	第1回	8(24%)	17(50%)	5(15%)	4(12%)	34(100%)
	第2回	8(26%)	19(61%)	3(10%)	1( 3%)	31(100%)

設問14.		4	3	2	1	計
全体	第1回	29(25%)	57(49%)	18(16%)	12(10%)	116(100%)
	第2回	32(30%)	57(53%)	13(12%)	5( 5%)	107(100%)
1年	第1回	6(13%)	25(56%)	9(20%)	5(11%)	45(100%)
	第2回	8(20%)	24(59%)	6(15%)	3( 7%)	41(100%)
2年	第1回	11(30%)	17(46%)	4(11%)	5(14%)	37(100%)
	第2回	13(37%)	17(49%)	4(11%)	1( 3%)	35(100%)
3年	第1回	12(35%)	15(44%)	5(15%)	2( 6%)	34(100%)
	第2回	11(35%)	16(52%)	3(10%)	1( 3%)	31(100%)

設問15.		4	3	2	1	計
全体	第1回	10( 9%)	37(32%)	41(35%)	28(24%)	116(100%)
	第2回	17(16%)	35(33%)	35(33%)	20(19%)	107(100%)
1年	第1回	6(13%)	14(31%)	15(33%)	10(22%)	45(100%)
	第2回	8(20%)	16(39%)	11(27%)	6(15%)	41(100%)
2年	第1回	1( 3%)	17(46%)	11(30%)	8(22%)	37(100%)
	第2回	4(11%)	11(31%)	12(34%)	8(23%)	35(100%)
3年	第1回	3( 9%)	6(18%)	15(44%)	10(29%)	34(100%)
	第2回	5(16%)	8(26%)	12(39%)	6(19%)	31(100%)

設問16.		4	3	2	1	計
全体	第1回	18(16%)	51(44%)	23(20%)	24(21%)	116(100%)
	第2回	24(22%)	48(45%)	15(14%)	20(19%)	107(100%)
1年	第1回	7(16%)	21(47%)	8(18%)	9(20%)	45(100%)
	第2回	10(24%)	19(46%)	5(12%)	7(17%)	41(100%)
2年	第1回	6(16%)	16(43%)	8(22%)	7(19%)	37(100%)
	第2回	6(17%)	15(43%)	5(14%)	9(26%)	35(100%)
3年	第1回	5(15%)	14(41%)	7(21%)	8(24%)	34(100%)
	第2回	8(26%)	14(45%)	5(16%)	4(13%)	31(100%)



## 資料 2

設問17.		4	3	2	1	計
全体	第1回	41(35%)	52(45%)	12(10%)	11(9%)	116(100%)
	第2回	47(44%)	40(38%)	8(8%)	11(10%)	106(100%)
1年	第1回	16(36%)	19(42%)	6(13%)	4(9%)	45(100%)
	第2回	16(39%)	15(37%)	4(10%)	6(15%)	41(100%)
2年	第1回	12(32%)	16(43%)	3(8%)	6(16%)	37(100%)
	第2回	16(46%)	12(34%)	3(9%)	4(11%)	35(100%)
3年	第1回	13(38%)	17(50%)	3(9%)	1(3%)	34(100%)
	第2回	15(50%)	13(43%)	1(3%)	1(3%)	30(100%)

設問18.		4	3	2	1	計
全体	第1回	42(36%)	33(28%)	20(17%)	21(18%)	116(100%)
	第2回	38(36%)	37(35%)	20(19%)	12(11%)	107(100%)
1年	第1回	18(40%)	15(33%)	4(9%)	8(18%)	45(100%)
	第2回	11(27%)	16(39%)	7(17%)	7(17%)	41(100%)
2年	第1回	13(35%)	10(27%)	9(24%)	5(14%)	37(100%)
	第2回	16(46%)	6(17%)	8(23%)	5(14%)	35(100%)
3年	第1回	11(32%)	8(24%)	7(21%)	8(24%)	34(100%)
	第2回	11(35%)	15(48%)	5(16%)	0(0%)	31(100%)

設問19.		4	3	2	1	計
全体	第1回	34(29%)	36(31%)	21(18%)	25(22%)	116(100%)
	第2回	34(32%)	37(35%)	17(16%)	19(18%)	107(100%)
1年	第1回	13(29%)	13(29%)	6(13%)	13(29%)	45(100%)
	第2回	10(24%)	14(34%)	8(20%)	9(22%)	41(100%)
2年	第1回	10(27%)	13(35%)	8(22%)	6(16%)	37(100%)
	第2回	10(29%)	9(26%)	7(20%)	9(26%)	35(100%)
3年	第1回	11(32%)	10(29%)	7(21%)	6(18%)	34(100%)
	第2回	14(45%)	14(45%)	2(6%)	1(3%)	31(100%)

設問20.		4	3	2	1	計
全体	第1回	16(14%)	43(37%)	36(31%)	21(18%)	116(100%)
	第2回	21(20%)	47(44%)	26(24%)	13(12%)	107(100%)
1年	第1回	3(7%)	18(40%)	15(33%)	9(20%)	45(100%)
	第2回	6(15%)	21(51%)	10(24%)	4(10%)	41(100%)
2年	第1回	9(24%)	12(32%)	8(22%)	8(22%)	37(100%)
	第2回	6(17%)	12(34%)	11(31%)	6(17%)	35(100%)
3年	第1回	4(12%)	13(38%)	13(38%)	4(12%)	34(100%)
	第2回	9(29%)	14(45%)	5(16%)	3(10%)	31(100%)



## 資料 2

設問 5.	4	3	2	1	計
第 1 回	15(29%)	30(59%)	5(10%)	1( 2%)	51(100%)
第 2 回	18(45%)	20(50%)	2( 5%)	0( 0%)	40(100%)

設問 6.	4	3	2	1	計
第 1 回	8(16%)	26(51%)	5(10%)	12(24%)	51(100%)
第 2 回	8(20%)	13(33%)	12(30%)	7(18%)	40(100%)

設問 7.	4	3	2	1	計
第 1 回	19(37%)	26(51%)	6(12%)	0( 0%)	51(100%)
第 2 回	18(45%)	14(35%)	7(18%)	1( 3%)	40(100%)

設問 8.	4	3	2	1	計
第 1 回	16(32%)	23(46%)	7(14%)	4( 8%)	50(100%)
第 2 回	11(28%)	20(50%)	5(13%)	4(10%)	40(100%)

設問 9.	4	3	2	1	計
第 1 回	11(22%)	19(37%)	10(20%)	11(22%)	51(100%)
第 2 回	6(15%)	18(45%)	13(33%)	3( 8%)	40(100%)

設問10.	4	3	2	1	計
第 1 回	18(35%)	9(18%)	13(25%)	11(22%)	51(100%)
第 2 回	10(25%)	13(33%)	13(33%)	4(10%)	40(100%)

設問11.	4	3	2	1	計
第 1 回	9(18%)	25(49%)	10(20%)	7(14%)	51(100%)
第 2 回	7(18%)	23(58%)	8(20%)	2( 5%)	40(100%)

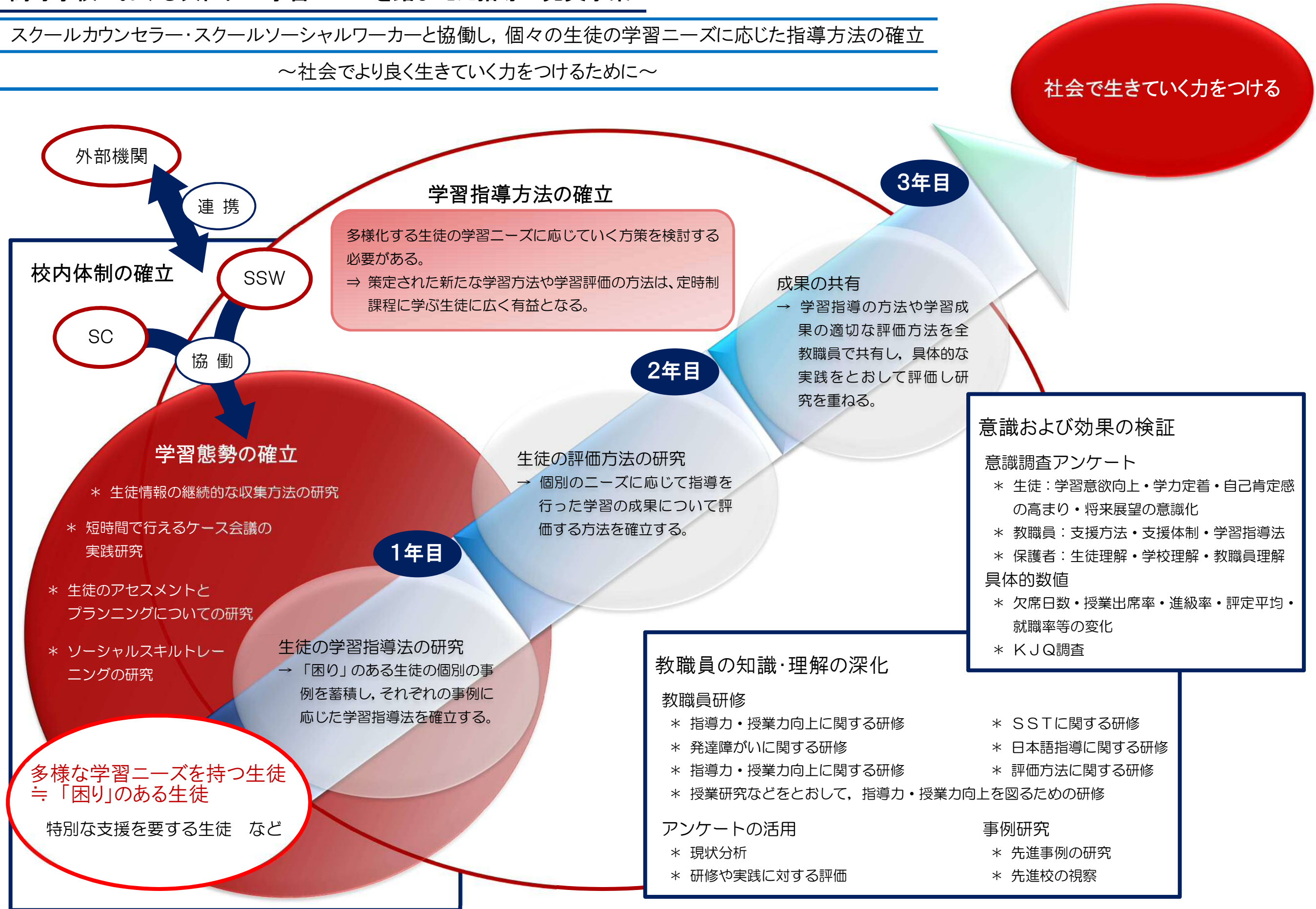
設問12.	4	3	2	1	計
第 1 回	23(45%)	21(41%)	4( 8%)	3( 6%)	51(100%)
第 2 回	10(25%)	23(58%)	6(15%)	1( 3%)	40(100%)

設問13.	4	3	2	1	計
第 1 回	19(37%)	29(57%)	2( 4%)	1( 2%)	51(100%)
第 2 回	16(40%)	19(48%)	5(13%)	0( 0%)	40(100%)

# 高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立

～社会でより良く生きていく力をつけるために～



平成30年度 文部科学省委託事業

「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた  
指導の充実事業」

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、  
個々の生徒の学習ニーズに応じた指導方法の確立

～社会でより良く生きていく力をつけるために～

報告書（1年次）

平成31年3月発行

発行者 京都市立西京高等学校 定時制  
京都市中京区西ノ京東中合町1  
電話（075）841-1240

編集者 研究指定実行委員会

印刷・製本 株式会社 大気堂